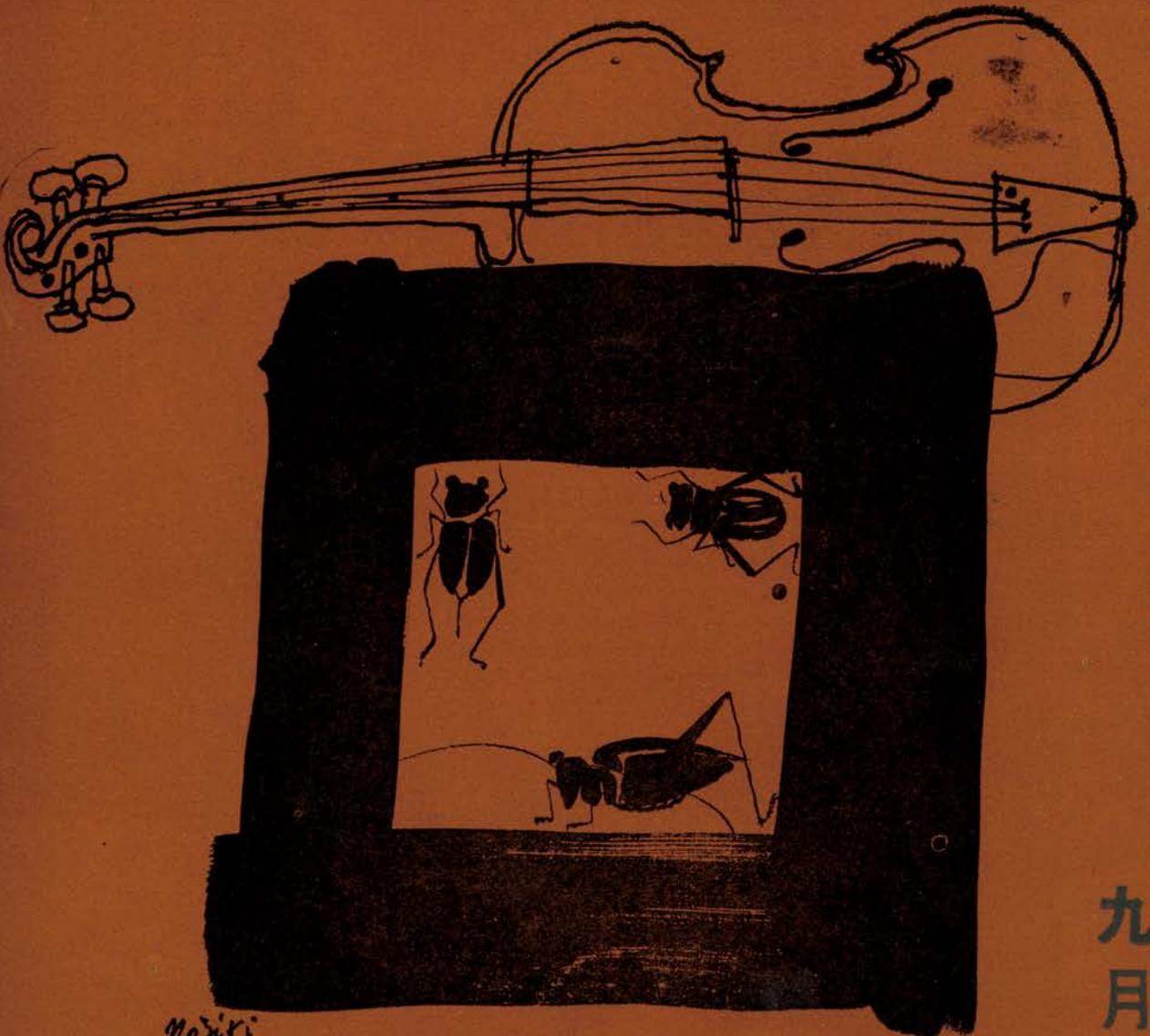


川柳の雑記



Nojiri

麻生路郎☆主宰

九月号

No. 412

Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

本社川柳忌句会

10月本社句会

近 相 前 湯
所 場 身 末
兼題

木枯やあとで芽をふけ川柳

柳翁をしのんで一人でも多く出窯いたしましょう。

日時 九月七日(木)午後六時

会場 関西会館(7740番)

大阪市天王寺区上ノ宮町四八

(天王寺電話局東隣り)

道幅 市電上末町八丁目下車(北へすぐ東側)

兼題 一 波 一 三 三 麻生路郎選

(総題選に限り七時出句/切厳守)

「無免許」(三三) 若本多久志選

「福相」(三三) 黒川家香選

「盛興」(三三) 後藤梅志選

席題 三 題(当日発表)

柳話 川柳忌とわれの 芽生路郎

呈賞 各題天位・各題副選天位に本行潤賞カッ

会費 百円

幹事 漢香・淡舟・いさむ・潮花・文秋・爾佑・狂三

・与呂志・白木・木洞・すくむ・薫菓子・水新

・柳宏子・舟遊・一二夫

★投句だけの方は郵券三十四

同封(切九月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・住吉 6081

大阪市民文化祭第13回川柳大会

恒例による大阪市民文化祭の川柳大会は左の通り第十三回を迎えるに至りました。初心者の方々も多数投句されますよう、おすすめてください。又どなたも出句の自然にかかわらすご来場を期待いたします。

主催 大阪市・大阪市教委

後援 毎日新聞社

日時 昭和36年10月15日(日)

十一時開場・一時開会

会場 毎日新聞大阪本社講堂(市電松屋)

司会 西尾 葉

開会の辞 川村 好郎

講演 堀口 城人

席題 当日二題発表

兼題 「めし」 麻生路郎選

「算盤」 武田北人選

「御堂筋」 市場段食子選

「舞」 布部幸男選

「興」 三条東洋樹選

余興 (中華古典詩意) 加藤 繁雄

開会の辞 戸茶巴之介

川柳賞 南・兼題優秀句に大阪市長・教育委員長から

川柳賞を贈呈。

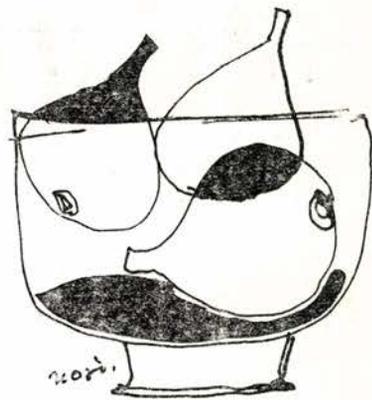
兼題投句 各題毎にはがき型句集及び官製ハガキ一枚

に二句ずつ明記、大阪市北区中之島一市教

委内 文化祭川柳大会係宛(九月三十日着

限り/切)

入選句集 希望者に配布。(五/四、郵券可)



川柳 名句と難句

麻生路郎

かないと云うのが世間の通り相場である。皮肉な句だ。

【二〇三】
棺の出たあとの夕焼見事なり

(蕉風子)

こんなに静かで、しかも美しい情景の句は珍らしい。一ト時ざわめいて棺が出て行ったあとの、虚脱状態へ、みことな夕焼が眼を射たのであった。それは人生の終りを飾る夢珠沙華のさびしさでもあり、羨しさでもあった。いつまでもいつまでもじき人を偲んで佇んでいたことであろう。詩情豊かな句として推奨したい。

【二〇四】
なんぼ洗っても百姓の手

(担童)

この句は啄木の「はたらけどはたらけど猶わが生活業にならざりちと手を見る」よりも、ズバリと詠んで、しかも深刻である。

啄木の歌には、まだまだ技巧の余裕があるが、この句にはそれが無い。真正直に投げ出している。これ以上説明の余地がない。しみじみと味うべき句だと思ふ。

【二〇五】

皮膚一枚そとはきびしい現実か

(香林)

漢石の「草枕」に、智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば

かも男の胸を鏡どく刺している。

【二〇〇】

黄昏れて来ても水車は慌てない

(圭井堂)

ゴトン、ゴトン、ゴトン、ゴトンと水車は同じ調子で終日働らき続けている。黄昏れて来ても少しも調子をくずさない。擬人法で構成された静かな田園詩だ。煩雑な世の中に慌ただしく生きて来た作者が、やがる。語り先へ打つだけで五目の利があるものと計算されているのである。

【二〇二】

持って来たお琴一度も聞かぬなり

(紫光)

(文庫)

以前は嫁入りの荷物に、よくお琴を持参したものだ。茶や活花に堪能であると同様に音楽にも造詣が深いことを表現する嫁入

手加減と知らず彼とは互先

(文庫)

「ウン、彼とは互先でね。毎晩のようにやってくるよ。」

と、おっしゃるが、社長は彼の實力をこそ道具だったのである。しかし、床の間にかさってあるに過ぎないで、夫すら一度も聞

【一九九】
忙中も女となると会いまする

(甲吉)

「こんな方が是非お目にかかりたいというていられます」

と、受付嬢が名刺を持って来る。

「今日は、とても忙しいんだがな」

と、云いながら名刺を見ると女名前である。心あたりはないが、

「では、応接へ通してくれ」

と云うことになったのである。こうした場合、働らく男にとって共通の心理だと云っ

てもいいほど面会をするものである。それは好色と云うよりも、どんな女か一っぺん

会って見てやろうと云う好奇心とも云えるし、又、忙中に於けるレジャーを知らず、

識らず求めているのかも知れない。

何んでもないように表現されていて、し

窮屈だ。とかく人の世は住みにくい。と喝

破している。それが現実なのだ。いくらき
びしいと云っても、その現実には真正面か、市長も同感だったが、官判に限らず規則の
ら、ぶっつかって生き抜くところに、生き 改廃は容易でないのだ。

〔二〇七〕

甲斐があるのだ。この句の心境はそこまで
到達していないうらみがあるので、今一歩
すすめる必要がある。

(恵二朗)

官判その上くわえ煙草なり

(柳 児)

上役の執務ぶりのスナップである。人を
訪ねて、斯んな風景によくぶっつかること
がある。怠け者でなくても官判にはウンザ
リするものだ。そこを衝いた句だ。

選挙事務所へ集って来る人たちを「蠅が
たかっているみたい」とは痛烈きわまりの
ない表現だ。彼等の一人一人が、何等かの
金か、名譽か、就職か。

私が新聞記者時代に、N市の市長を訪ね
た。特に事件があった訳ではない。市長と
うまあいだったからである。役所の人達は
殆んどひけていたが、市長室に灯が点いて
いた。

〔二〇八〕

「勉強ですね」
市長は私を眼で迎えて、しきりに官判を
捺している。

からだじゅう性器のような女なり

(兎)

「なあに、火葬許可証さ」
「そんな判、廃したらどうです。もう焼い
たあとではないですか。そんな判は課長
どまりでいいと思うな。判を捺しても捺
さないでも、どうせ事件が起れば最後は市

随分露骨に詠まれているが、それほどい
やらしさを感じない。この句を一読した男
性にとって、なるほど、そんな女性がたし
かに存在していることをうなずかせるに充
分な句であるからであろう。

と、私はぶえんりよに聞いた。

語張法で表現したところが、この句のヤ
マである。

〔二〇九〕

鯛の眼をみつめてうたいじつと聞き

結婚披露宴に列席しての感想であろう。

低能は低能なりに、その腰
に女らしい線の美しさを見せ
たので、驚いたと云うのであ
る。白痴美という言葉がある
ことから考えても、セックス
と知能とは全く別の問題であ

眼のやり場がないので、眼先きに置かれた
鯛の眼をみつめて、話を静かに聞いてい
たと云うのである。坐りつけぬ人にとって
は話が終っても、足がしびれて一寸は立て
ないものだ。笑えない滑稽とても云えよ

〔二一一〕

世話好きの女房サルマタまではかせ

(七面山)

世の中には自由学校の五百助のように、
ボヤッと暮らす亭主も相当沢山存在する
が、何から何まで亭主の世話をやかねばお
さまらぬ女房も、かなり沢山いるものだ。

〔二一〇〕

みおつくし鳴っても散歩帰らない

(静 馬)

仕事から帰って晩酌がすむ。まだ寝るに
は早い。冷房のある事務室から戻って、非
冷房の我が家の暑いこと、暑いこと。一寸
散歩して来ると出た切り雀だ。十時のみお
つくしの鐘が鳴ってもまだ帰らないと云う
のである。もう三軒ぐらいいは梯子をしてい
るのである。サラリーマンらしさが巧み
に詠まれている。

〔二一一〕

低能の腰も女の線となり

(日 満)

低能は低能なりに、その腰
に女らしい線の美しさを見せ
たので、驚いたと云うのであ
る。白痴美という言葉がある
ことから考えても、セックス
と知能とは全く別の問題であ

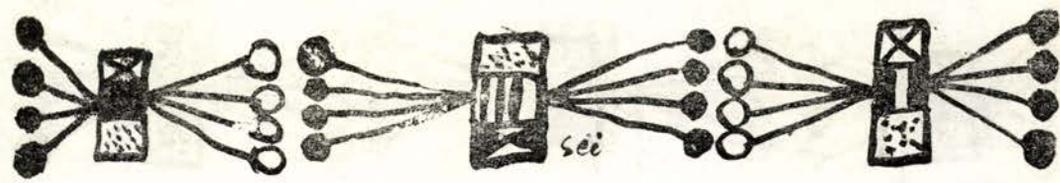


結婚式場
長生殿

近代的な設備を ととのえた
関西一の結婚式場 貸衣装も
豊富にそろえております ●6席



大阪日本橋
松坂屋
TEL 63-1171



早よどかな躑とぼしそうな婦人靴

鳥取市 河村 日満

では俺が出るとは云わず批判する

ゆで卵むきむき砂丘尋ねられ

鐘の音も五月は甘い流れてき

豊中市 足立 春雄

悪運が強いと栄転送られる

労資の尻理屈値上げだけ定り

倉敷市 木村 千容

盆栽いじり四十年の歩み

鉢の木の幹からかもす大自然

何かもの言いたげなやつれガヤ

鶴形の杉貫録を日々備え

大阪市 木村 水洞

災害になってからなら出る予算

家付きの妻に夏瘦せいたわれ

大阪市 真鍋 一瓢

女見る目に年があるかと旺なり

ピンクパー儘えた匂いで取り囲み

お女将さん悪どうなってポテが入り

ママさんも来てむしを引く昼のパー

大阪市 後藤 梅志

腹の中まで腐ってる腐ってる

ハガキ一枚ずつ何か書く生き甲斐

夏になり財布は盗らば盗れと入れ

落雷をしたに関電記びを云い

米子市 小西 雄々

雨雲にデートの足も早くなり

空瓶の値も考えるウイスキー

スランプに私生活まで批判され

美笑氏逝く

極東の句会も選者の席につき

大阪市 山川 阿茶

商売にする気お好み喰べあるき

気狂いが運転しても走るなり

大阪市 金井 文秋

釣れてよし釣れなくてよし療養の

ドル箱になって先生に変わり

加賀市 那谷 光郎

今の世は母にも新語覚えさせ

お爺さんまだ棕櫚で編む蠅叩き

スキヤンダルを艶福家にしておだて

岡山市 浜田 久米雄

夏の陽へせめてすだれをぶらさげる

午後五時へ夏に解放された足

網戸から見る盆栽が枯れかかり

出雲市 尼 緑之助

山を抜く雨が奇勝を生んではれ

音立ててネオンの街を狂う水

二三覚えたのに大臣又変り

大阪市 水谷 竹荘

調理婦の恋高下駄で逢いに行き

鳥取市 杉谷 湖山

映画の情うちにはあんな部屋はなし

西宮市 小沢 史葉

銀婚と知られて旅の宿樂し

レジャーブームついてはいけぬ給料さ

栄転に汚職のにおう顔と顔

京都市 大鶴 喜由

素裸も見とうござんす貰うんなら

こっぴどく振って男の出方を見

胸ぐらどころか女房蹴上げて米

東京都 山根 白星

義噴やや呂律あやしく安定所

出来心ゆるす主人も身に覚え

夕刊の子に困らんの灯が憎い

うなずいて自首する髪を梳いてやり

顔だけは出す赤坂の半時間

落魄の友のリアルのない気負い

奈良県 飯降 白香

挨拶に託して女の手をにぎり

歯車の狂うた奴がのさばって

宿敵に勝って淋しく洋酒なめ

奈良県 西辻 竹青

愛婚古典の死



死ぬる筈あんまり人がようすぎた

呉市 林野 魁光

雷も一役情痴な夜とはなり

父ちゃんと呼んで二男の子が迎え

どっちでも行きます耳飾りがはしゃぎ

内緒の手紙が妻へ戻つて来

岡山県 福島 鉄児

ダイナマイト抱えた様な妻と居る

岡山市 服部 十九平

オイコラへ荷台の妻が飛び下りる

階段を一つ飛ばして男の子

尼崎市 長谷川 三司

ほろび行くものみな美しき雲流る

大の字に寝て六畳の広さ知る

大阪もここは場末のはもの皮

水鉄砲子供は虹の中に立ち

組板と庖丁所詮はつぎの悲劇まつ

西宮市 若林 章右

丹誠の胡瓜市場で五円也

倍増を鼻であしろうドルの国

三十年勲続

三十年紙子の組師に及ばねど

広島県 山田 季賛

共稼ぎ妻と一緒に駄まではしり

上役が仕事の虫で気に入らず

岡山県 田村 藤波

悩みある人とは見えぬ自家用車

口笛を吹いて百点の子が戻り

抑制の茄子かシーズンとりちがえ

児島市 本田 恵二郎

面構えボクたち目下反抗期

老妻と思ひ出ばなしくいちがい

靴の紐まだ結べます三次会

へそくりに救われてから恐妻家

鳥取市 森本 法泉子

候補者にはつきり敵にまわされる

境界のことにはお世辞ぬきで来る

倉敷市 松村 万古

盆踊此処も流行歌に合わせ

乳幼児もう冷蔵庫の味を知り

教科書にないのが不足自衛隊

堺市 高崎 雄声

舞台度胸満点と言う嫁の所作

席譲る娘の素顔聖く見え

眼を愛すいらぬ時には閉じておく

眼薬をさしてもテレビへ囁りつき

広島県 藤井 明朗

宮の前任んで神様無沙汰勝ち

家庭電化して余暇を病んでいる

現表に知る水害にあわてたり

岡山県 水松 東岸

また飲んでやるぞと思ひながら病み

雑魚に踊らせ主役は脇で喚う煙草

平然と女が鶏の首しめる

倉敷市 野田 素身郎

駅長が代つて駅の花壇荒れ

善政の知事に職員酷使され

片言で毎晩遅い父を責め

大阪市 伊達 暖子

文楽を観てから去ぬと慌てさせ

アイシャドー米世は独に生れそう

今和尚味な功德を書き続け

兵庫縣 酒井 ひか平

三面に何があろうと株のこと

ラッシュアワー婦人がどない押そうとも

菅屋市 丸川 初甫

伴せはモデルキッテン光らせて

天気予報室戸岬の波も云う

オール上げて波にまかせる二人連

唐津市 新岡 回天子

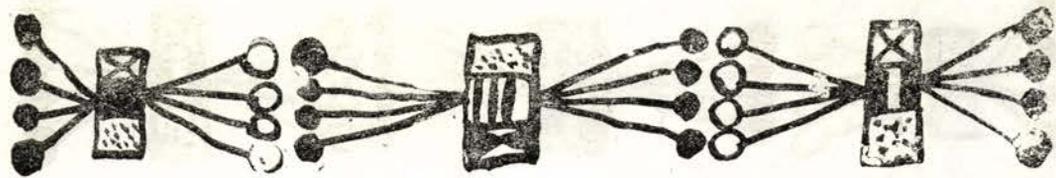
繁華街昔は河畔そが宿

岡山県 池田 古心

鯉飼いに来たよに餌だけよく取られ

東京都 石居 高志

先に寝ているとは麻雀やるつもり



身の上話マダムポイントだけはすし

くるまで送ると体よく追い出され

大阪府 早川清生

伴奏者歌手をくさして女と居

他家へ嫁くべかりし過去を令夫人

男へめぐって派出婦会にいる

不倫つづく逢えば別れる話して

堺市 辻圭水

相談欄経験したよな答えかた

麻雀の疲れへ冷房ききすぎる

値上げして外装だけが派手になり

きりきり舞いしたのを税務署知っており

大阪市 児島与呂志

ポーナスの味に婚期を又逸し

若い娘の肌をうらやむ歳を知り

一生の懐古とならん女にて

西宮市 小浜牧人

病歴は古く文鳥飼いに馴らし

リバイバルムードへ拾田札恋し

盲愛をされて人形に似たはたち

愛の巢の窓に金魚も泳いでる

ダイレクトメールで夢を誘いに来

ジャパニーズスマイルでワシントンへ着き

池田市 前川左文字

団地妻になって駅まで送って来

一輪を咲かせて団地族となり

岡山県 池上知恵美

まん丸い家に住みたや積木つむ

トンボ悠々ひしめき合える世を眺め

大阪市 橋高薫風子

先代に笑うた写真などはなし

その恋も最初は歩くだけだった

松下幸之助の所得もこの世でのことだ

下関市 中村九呂平

気分屋の風鈴扇風器で鳴らし

ストリップだけを見たよな旅話

一段と目を痺らしてまだかせぎ

奈良市 宮口笛生

川柳みちのくの旅より

仙台

何本かお城があった頃の松

松島

遊覧船コース通りで物足らず

瑞巖寺

八っ房の古梅の樹令へ聞き直し

大阪市 西川晃

阿呆なことやらかして来た二日酔

金バッジつけて無頼のヒロイズム

日蝕の如く佗びしや妻が陥る

釜ヶ崎風景

悲壮にも男娼として生き抜けり

当り屋の手違い泥と血にまみれ

鳥取県 田中蛙眠子

義兄死去

山羊の声谷間に長いお通夜なり

棺かつぐ軽るさが心へのりかかり

山プロに道教えられ野辺送り

飯焦げたのも大鵬のせいにする

マニキュアの指がおたいこよう締めず

また鏡見てアイシャドー拭いちゃった

神戸市 仲 どんたく

ハズ一度交換しないと団地族

睦言の反応医者様の様に待ち

おっとりとしていて舞妓ガムをかみ

銀行のソファで涼む昼下り

平田市 久家代仕男

行水の位置にする気の糸瓜棚

牛なみの男にされてよく稼ぎ

うちで生る頃のトマトの安すぎ

蝸牛そっちへ這えば薔薇の刺

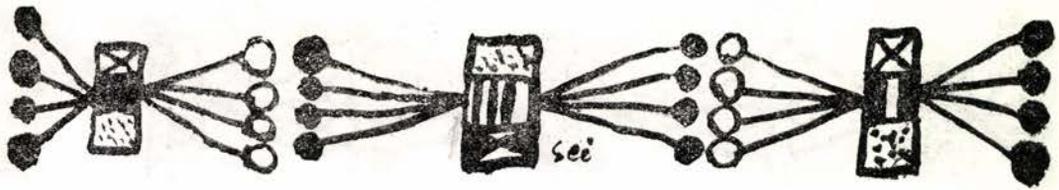
大阪市 本多柳志

石橋を叩いて株屋から戻り

ポーターと変えても出前居てくれず

ポーリング五輪の客を待つ構え

出雲市 原 独仙



サーピスの線心得て女中去に

泣くわけをキス盗まれたとも云えず

顔中を口にし笑うのも女中

岡山市 江 国 幽 谷

三回忌せよと坊主が催促し

妻がいるから掛取りを目で去なし

ショートスカート前へ座って下さるな

どのへんがよいのか夫婦になると云い

岡山市 光 好 陽 子

更年期シミーズだけで恥じらわず

正直に先生に告げる子で困り

放蕩の息子子無しがうらやまれ

西宮市 樋 口 舟 遊

食あたり安物たべたとも云えず

奈良支部句会

たのもしさみな十七才であり柳人

新潟県 高野むじな

化かされたでは承知せぬ世とはなり

高い税の其れもかからぬ程貰い

大阪市 石 倉 藤 風

苦勞のひとつに妻君賢こすぎ

残したいことは下手でも書いておき

クーラーを据えて庶民でないつもり

愛媛県 村 上 旭 童

ややあって後続なきを感じいた

我にかえった時還暦でありしとか

百姓は父ちゃんかぎりとうそぶいた

倉吉市 大前 鳴 恍

この宿も連れ込み屋とはつゆ知らず

半どんの窓口ビシヤリしめられる

大阪市 米 虫 一 乃 字

再婚にまだ残ってた初心なところ

怪談のヒロインになるいい女

神戸市 傍 島 静 馬

香奠の半端につき合いさせられる

雨乞えば堤防切れるほどに降り

二号にはいとも気軽るに買うてやり

熊はんも外遊ブームにとりつかれ

ポロクソに云われ子飼いの専務なり

大阪市 河 井 庸 佑

遅進児のちょっとした出来をほめそやし

ねずみ一匹取らずに猫はのうのと

大阪府 谷 沢 好 祐

枯れ果ててなおバラのとげ突きささり

熱引いたらしく末ッ児元になり

男にも七色をしたバンテイが

泉大津市 高 津 徹 也

ふくよかな顔一杯に訓辞する

俺は河原の枯すすき嘘をつけ

襟足にむしろゆとりが見えている

愛媛県 横 紫 光

色彩の暗い子の画が不安なり

彼女には振られ妻には疑われ

いま泣いた顔で精進料理ほめ

青森市 工 藤 甲 吉

サラリーマン坪何万にハラを立て

大っぴらにミセスBG欠伸する

ひき逃げはアロハのシャツにサンダラス

玉野市 伊 原 明 林

デモ焼けをした娘が帰える夏休み

糞尿車市役所という顔で来る

飲んで来たかたきを今朝の塵ハタキ

松江市 小 林 孤 呂 二

底辺のしあわせ今日も青い空

コーヒーのことになると大学出

夏空のギラギラギラと快打飛ぶ

松江市 舟 木 与 根 一

子の科学星の詩情をぶちこわし

線越して以米女がブラブラし

夏祭公然と香具師にひっかかり

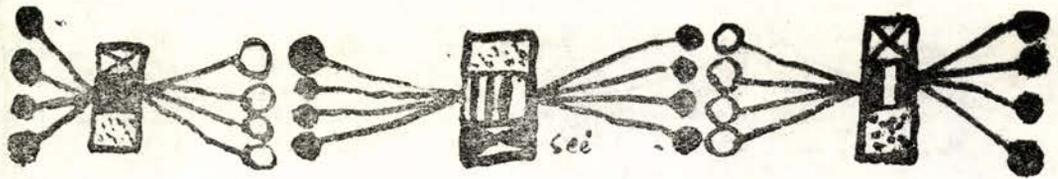
三面をみんなつぶして豪雨荒れ

豊中市 林 夢 虹

自殺未遂むさぼるように飯を食い

少年の恋は女の子をいじめ

美智子妃の微笑もう庶民ではなし



西宮市 山本 一傘

おつむてんこれ人生の始めなり

税務署の帰りにチャンバラ観てこまし

マネービル他人の財産計算し

税務署よやくぎ無職で食べて行く

大阪市 今西 生 齋

大阪弁習作

がしんたれテソツがみがみと言うたんな

わやにしようたとそういちがいに言いな

苔寺の苔の青さへガムの滓

紅がらの格子濡れ来るドドンパー

ハンサムが生活力が嫁く思案

封建のままで波風ない家庭

ままごと遂に葬式となり叱られる

社外へも社長の口癖せ膾炙する

奈良市 内海 敬太

ドリムランド開園

自然改造金々々で詩も死し

洋裁に通うて養子を探して来

農業農業メダカの住み場さえもなく

扇風機とめて札束読みなおし

小松市 関戸 宗太郎

税の癡なんぼ読んでも無駄だった

名刺にはKK間借りと書いてなし

株少し持たせ店員こき使ひ

石川県 高山 涼 髪

どしゃ降りに負けず飯場は飲め歌え

売春の絶えることなき週刊誌

脱ぎすてのストックキングの疲れよう

美弥市 安平次 弘道

折伏の候補にされる程不運

乳くさい匂いが好きと子沢山

宇部市 平田 実男

社の人事こんな無口な夫にし

人情に負けそう規則を楯にする

手ばなかわ癖が成金まだとれず

二人目の因果腹帯からお古

俺よりも母校けなされたのが悔やし

大阪府 高橋 尚史

井池で値切っただけを飲んで去に

静けさに馴れず林間学ばれず

番台と思えど視線恥しく

同 舟 近 詠

大阪市 麻生 霞乃

ろくろ廻る砥部の歴史を知らぬげに

伊予緋嫁のみやげに気骨折れ

大阪市 橋本 緑雨

トラック衣粧無理算談と書いてなし

朝寝坊こだけ残すクリナー

砂丘の二人へ雨風止まぬなり

長野県 高峰 柳見

ねだる種抱いて足組む応接間

真昼間非番はギターかき鳴らし

右翼すぐ捨て身の構えほのめかし

和歌山市 秋月 宏方

姑はいやな響きのあることは

孫のある顔とは見えずベレー帽

湯の町のムードの一つ飛ぶ燕

石垣はまだ黙香権続ける気

今治市 長野 文庫

たくましい気魄昔のままであり

壁一重ながらアバウトつきあわず

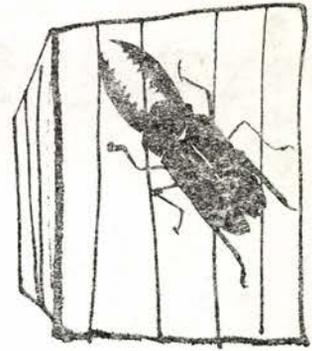
食わせたなら直ると医者は思いつつ

大洲市 米沢 暁明

待ちわびる竹へは糸瓜まきつかず

参観日子の辨言おうか言うまいか

部屋で着てもうはしゃいでいる水着



歐洲

とびある記

中島生々庵

六月六日の夜九時大阪駅から東京に向けて出発。予想しなかった派手なお見送りにびっくりもしたし、感涙もした。見送って下さったお一人お一人が、心から私の馴れぬ長旅を案じて下さるその御親情がひしひしと胸に迫る。ふと思ひ出したのは橙舎君の

一本の外はどうでもよいテ
ーブ

橙舎君とは全く反対の心持ちにおのき乍ら車窓に渡されたテープの一条一条を固く握りしめたまま、列車は離れてゆく。

七日八日と東京に居る妻の老母や親戚とのお別れ、旅仕度の補充等に暮れ愈々九日の夜十時羽田を出発。山下清と云う有名な一行の中に加わっていたせいもあり、報道陣や家族の見送りが大変なもので、「元気でね」「行って来ます」「お体をね」。万感を集約した寸言胸を刺すと云った言葉があらからちこちから湧き

上がり身動きならぬ人波を押し分けるようにして改札を出ると、ここは旅行者だけの溜り場、ホッと

して冷たいジューズで汗を入れ、目の前には私達を遠く運んで呉れる「エア、フランス」の巨体が煌々たる照明の中に静かに立って居る。心強い限りである。愈々乗り込み。見送りの人達が遠い暗い中からしきりに何か叫んで居る。それが不思議に妻の声、子供の声、兄弟の声、近親の声として私だけが別に聞えてくるような気持ちになり、と暗い声のする方に振り返り帽子を振って見た。

タラップでも一度振り向いて見たくなり

九日は朝から雲が低く、時々小雨模様で雨男の私の旅立ちにふさわしいわいと胸の中で一人うなずく。それも出発直前には晴れてきれいな風のまたたきも見え初めて来た。

雨雲を振り切るように羽田

たち

初めて乗るジェット機の中が広いのに驚く。定められた席に案内されてベルトをしめるとさすがに観念の胸がきまる。目をつむると家族の者達の顔が又しても浮ぶ。妻の目を羽田に残してゐる弱さ

やがて巨体は浮び、快適なエンジンの音が何とも云えない安心感を与えて呉れる。機内アナウンスは先ずフランス語次に英語、どうやら「ようこそ私達のエア・フランスを御利用下さいまして有難うございます」と云う意味らしい。当分日本語もお分れたと思つて居たらキレイな日本嬢のホステスが派手な和服で二人現われ、いろいろ世話をしたり注意を与えて呉れる。他のフランス人のホステスに寸分劣ることのない体、容貌、態度、ただ和服のきこなし、帯のしめ方、和服と帯の不調和な色彩

り、こんな事には常々から氣にし

過ぎる私の困った悪趣味が又こ

で頭をもち上げて来る。
着こなせぬ和服が惜しいス
チュワデス

今飛行機は一万余以上の高空を飛んで居るとのアナウンスを夢のように聞き乍らゾゾウとうと。ふと少し騒々しくなつて目を覚し見ると夜が明けて居て窓から山なみの連りが見える。万年雪を頂いたマッキンレーの山脈である。空はあくまでも澄みきつて目が痛い程の大蒼である。羽田を出てから五時間程、日本時間で三時過ぎだのに北極の陽は高くマブしい。これから一時間半すればアンカレッジ空港である。

ねむた目をマッキンレーに起こされる
空の蒼、北極に來て極まれり

やがてアンカレッジ空港着。初めて踏む外国の土地、寒い等の感じは些かもなく心にくいままでに快適である。約一時間休機の間、空港内の食堂に入る。顔を洗つて食卓につけば昼めしだと云う。

これは昼めしですよ時差が狂い出し
胃袋がローカル時間にあわて出し

食堂にはダツタン人、エスキム人達の人物絵が壁にかかつて居る。日本人に似た顔である。パンやコーヒーの食事でなかつたら、或は隣りの卓に多勢の外人が居ないならばまだ日本と余り変らぬ坐

り心地である。

やがて出発の時間と報らされて機内に昇る。羽田の時と全く違つた足どりでタラップを昇る。五、六時間で余程心のゆとりを取り戻したらしい。これからハンブルグ迄十時間の飛行が続く。一直線のコースを五五〇軒の速力で。窓からのぞいて見ると連山の姿も消え、ただ見えるのは雲海と時々その雲海の切れ目から黒く大海のきびしい姿がのぞくだけ。ゆけども、ゆけどもと云う感じである。恐しいまでに雄々。悠々。大自然に挑みかかる最新鋭機。これでもか、これでもかと科学の冒険に、挑戦に、大自然の姿はせせせ笑いもせぬ。うたた寝の猫の耳にとまつた蠅程にも感じて居ないようだ。なぜかは知らぬがこの動と静との戦いに私の胸を冷たい風が通る。

私の腹巻の中には羽田以来母の遺影がおさまつて居る。幽と明との辺が境界だろう。母に尋ねて見たら幽も明だし、明も幽だよ、人智とか科学とかさかざかしい針でさぐるのが愚の骨頂だよと答えるかも知れぬ。十年前に亡くなった母と共に一万余の高空を六百キロの速さで飛んで居る。母が深く私が明か、……何時の間にか深い眠りに陥つて居た。機に馴れた安易さと、たいくつき機内の客の大部分がそうであらう。眠りが私達を救つて呉れる。

ゼット機に雲海きき耳立てただけ

雲海の切れ目、北極の海きびし

ハンブルグ

幾度か食事や飲み物が出てハンブルグに着いた。羽田を出てから十八時間位である。現地の時計は七時十五分を指して居る。どうせ買物は土曜日で駄目だし、入浴でもして夕食後はベッドにもぐり込んでぐっすり眠ろうと思つて居た。ところがこの七時十五分と云うのが十日の午前七時十五分であると云う。ホテルに着いて荷物が室に届いたら早速買物や見物に出かけると云う。全く頭が軟倒しそうに時差が狂いまわる。アルスター湖畔のレストランで朝食。遊覧船を眺めながら涼風の中で冷ビール。ドイツのビールである。吾れ異郷の地にありの感がひしひしと迫る。目に入るもの、肌を感じるもの凡てが物珍らしいものばかり。ビール瓶のレッテルにまでこまかく目が引かれる。整頓された物静かな街。街のまん中にこうした大きな湖。その湖に白鳥が浮び、ヨットが走っている。戦災も相当にひどかったと聞いて居たのに、菩提樹に抱かれて、清潔な感じのする街である。歐洲第一日目の街の印象として長く忘れ得ないだろう。

午後ハイゲンベックの動物園、港に行つて繁いである大小の船やエレベーターで降りて対岸にゆく通路の見物。夕食後九時半頃か

ら有名な噴水の夜景を見るためにチボリに出かける。十時と云うのにまだまだ明るい。

大変な人出であるが少し冷えて来る。北欧と云う空気である。電気照明に色を変え形を変えてゆく大掛りの噴水に驚いて帰る。十一時過ぎるとほんとうに夜と云う感しが出て来てベッドにもぐり込む。

磨かれた道路に見はる一日、目

アルスター湖狼逸の味の冷ビール
暮れかねて暮れかねてハンブルグ夜となる

七色の水 チボリの夜の闇菩提樹に抱かれ北欧と云う姿
暮れにくく明けぬ夏の北歐は三時頃には明るい。私の時計が止つていのではないかと思う程である。

ストックホルム

正午ハンブルグを発つて二時間でストックホルムに着く。午後遊覧船で島めぐり。最後に上陸した公園のレストランで休む。若い男女の学生が紅茶でもススリやら低い声で話合ったり、冥想するかのように沈黙したり、とにかく静かな国民である。蒼白い顔に金髪の美人が多い。夜はスカンセンの夜景を見物にゆく。益踊りみたいなものをやったりなかなかの賑やかさである。社会制度はあらゆる面

で非常に発達して居て、医療方面は勿論、博物館は教育を兼ねた設備を目的とし、スウェーデン全国に分布されて居る由である。ただ残念な事は日照時間が極めて短かいので、丁度夏季に当る現在は公園であらうが、文楽協であらうが日向ぼっこが、半裸全裸で寝をへつて居るのが私達としては驚かされる風景である。国家が奨励してやつて居るので平気である。

この国の豊かさにして陽にかつえ
太陽を迎えおしげなく全裸日向ぼこあられもないと思ふまじ

翌日九時半からバスで市内見物。十二時半頃昨夜見物に来たスカンセンに到着。昼食後国立の大病院コロリンスカ病院を見学。建物や設備は目をみはるものがあるが、患者は至つて少ない様子で、入院患者等は殆んどない。二時間近くで見学を終りホテルに帰る。この間に私にとって一大事が出来た。と云うのは今の病院で一

寸休息した室でカメラを二個置き忘れたのを思い出したからである。式場氏から連絡して頂いて大使館からお手配。無事翌日手に帰つて来たもの。一時は大騒ぎであった。そろそろ頭の調子が変になつて来たのではないか。私だけでなく他の団員の中にも忘れ物が時々出来るような場合である。寝不足だよと忘れもの慰め

こんな空虚、俺にもあつた忘れもの

夜九時から地方色豊かなスウェーデン料理を味わうためにスタルメズタルと云う料理屋に行く。実に豪華なものでここでスナックと呼ぶ強い酒、鱈の刺身を初めて食べる。翌十三日朝大使館からの電話で昨日の病院へカメラを取りに行くようにとのこと。タクシーで飛んで行つて受付氏に会う。「お前の俸せを喜ぶよ」と云つて握手して呉れた。サンキエウベルマツチを繰り返し乍らホテルに帰り、やつと出発直前の一行に間に会つた。

忘れもの出てかけつける瞬間よ
ブロークンの英語がほんとの役に立ち

コペンハーゲン

そのまま空港へ。コペンハーゲン着四時半
空港には旧知のステーマン女史、牧村書記官が見えて居て、ホテルまで同道。ロビーで女史と久闊を述べ路郎先生からのお言づけを渡す。牧村書

記官からはデンマークに就いて細々の御説明やら御注意を頂く。夜は女史の招待でいろいろ御馳走になる。異国で飛び切りの親日家の御接待は身にしみて嬉しい。ホテルへの帰り道、チボカスは折りから降り出した雨のために止めて帰宿。そのままベッドに入る。

翌朝市内見物をすまして四七軒離れたノースシーランドに着きマリエンストと云うレストランで朝食。それからハムレットの城で有名なクロンボルグ、フレデリックボルグを見物して夕方ホテルに帰る。相当に疲れて居るようだが不思議に眠たくない。

争えぬ疲れが無口な人にする
これが旅愁か個室寂しく鏡見る
夜は牧村書記官に案内されて中華料理を御馳走になり「メシ」の



ビールはアサヒ

味を思い出す。
郷愁ちよつぱり中華料理の
米のめし

フランクフルト

十五日十一時、フランクフルト
着。バスでウィスバーデンのホテルに
着く。午後再びフランクフルト
トに出て買物をしたり「ゲートハ
ウス」を見学。ゲートは相当の名
家の生れである事が五階建の遺宅
や調度品や庭の造りから充分察す
ることが出来る。そのゲートハ
ウスがこうして商店街にはん近接し
て在る現状からありし昔の想像は
一寸困難である。

ゲートハウス隣りはデパー
ト喫茶店
情熱と孤独 ゲートは生き
てるこのデスク
グエアルの悩みもここで書
いたやら

ハイデルベルヒ

十六日朝、ウィスバーデンを立
つて憧れのハイデルベルヒへ特別
バスで到着。ネッカー川の流れに沿
うたホテルに着く。連日の疲れも
一べんに飛んで終う程落ちついた。
そして生き生きとした新鮮
さが迎えて来る街である。狭い通
りの大学前を抜けて、何はおいて
も古城に登る。世界で一番美しい
廃墟と云われる程あつて千年の歴
史が周囲の自然の美と相俟って、
もろもろの物語をささやいて呉れ
る。大学も独逸最古のものとして
十五、六世紀ドイツ文化の中心を

盛り上げたその飾も鮮やかに私達
の皮膚に感じて来る。

ささやいてくれる憧れのハイ
デルベルヒ

古城は寂しきれど青春ハイ
デルベルヒ
ネッカーの流れ千年の夢つ
きず

アムステルダム

十七日午後アムステルダムに着
いた。昨年頃から日本とオランダ
は国交が余り芳しくないから少々
注意して欲しい旨告げられる。か
ねてから聞いていたより自動車の
利用者の多い事が目につく。六十
万台で二人に一台の割合だと聞か
された。アムステルダムと云えば
アイアモンド。早速会社から空港に
出向いて宣伝に来て居た。レンブ
ランの家、市立美術館見物。ゴッ
ホの原画がずらり。一寸目を見は
る。アイアモンド会社には私は用
のないとどこかが研磨工程を見学
したり豪華なダイヤを見せて貰う
た。夜は遊覧船で夜景見物。観光
用として照明が行きとどいて居
る。橋が四百もあつて北欧のベニ
スの名をはずかしめない。

ほんもののゴッホがずらり
目を見はる

自転車が世界で一番巾きか
せ
夜景静かにアムステルダム
は水の街
ダイヤモンド会社で持ち金
寂しき

翌十八日は九時半にホテルを出

発して、オランダの田舎風景見物
と首都であるヘーグへとバスは急
いだ。あいにくの小雨であるが雨
は久しぶりである。バスは百キロ
位の速力を出して北海の海岸沿い
に立派な道を通つて走る。(途中雨
の中を有名なチュウリップ園に立
ち寄り写真だけ撮して買物はせ
ず。)

「道路のよしあしはその国
の政治のよしあしだ。」と運転手
が自慢し乍ら運転する。少々癪に
さわりもするが尤もな事である。
この道を旅行する人達の旅日記や
先月テレビでも紹介されたが生ニ
シの立ち喰い。酔につけてカヤク
と一しよに食べる。私の様な左党
には、一寸イカス味である。小雨
の中の屋台店に立ち食いしている
紳士の姿はどうしてもスナップも
のである。同じ道ですぐ近くにア
ンデルセンに出て来る人魚の像が
寂しく雨の中に立って居る。

人魚を入れて記念写真を撮るの
は可憐な乙女に同情する身に覚え
のある人達であろう。

スケベニンゲンに着いて昼食。
これからヘーグに向う。商都をア
ムステルダムにおいてここは政治
の中心というだけあって静かな街
である。市内見物の途中陶器の製
造販売所を見学。オランダの陶器
に今更驚きの眼を見たが一つ驚
いたのはオランダの風景を実に精
巧な仕掛けで見せて呉れる大がかり
なパノラマであった。がっかり
したのは風車である。バスで幾キ
ロも走って居ても、うっかりする
と見落す。もう観光客のために保

存してある程度である。絵はがき
の方がよっぽど美しい。
オランダの田舎風景は何として
も緑の牧場に群れる牛の生活であ
らう。三分程前に生れたと云う仔
牛を親がいたわつて居るのが私達
のバスから十米位のところに見え
る。実にのどかそのものである。
六時十五分アムステルダム空港を
発つて愈々ロンドンである。

これから旅程はロンドン、パ
リ、ローマ、カイロと後半に入る
のであるが、今までの前半は、川
柳人にとっては、寧ろ風光明媚す
ぎ、静か過ぎ、整いすぎた感じて
あるが、ロンドン以後は私自身の
旅馴れたせいもあるが、少しは働
きかけた川柳眼を喜ばせる事が出
来た。

これからは路部門の逸材。川柳不朽
洞会員。

續

川柳書架

(12)

川柳句集

ふんやと

(須崎豆秋著)

★巻頭に麻生路郎氏の序がある。
その一節を抜くと、ユーモアの血
は川柳人の誰の血管の中にも流れ
ている。川柳人にとってこの血ぐ
らい尊いものはないと私は常に思
っているのであるが、作家豆秋く

らしいこの血を多量に持っている者
は弘く作家を見渡してもそう沢山
は居ないようである。それも奔流
となつて溢ふれ、ほとばしると云
う激越さはないが、一つの流れの
中であつて、あちこちで溜り、淀
んでいて、何かにぶつつかると、
至つて静かに、のんびりとユーモ
ア味を多量に放散してすぐれた社
会詩を生んでゆく手際は何人の追
随もないものがある。しかもそう
した血の流れたままのものであつ
て、面白く飲みこなそうと云う色
気などは微塵もないのである。(以下略)

★昭和三十三年十二月十二日三版
発行。頒価百円。B 六版、六五
頁。著作兼発行者、大阪市阿倍野
区旭町三丁目一四、須崎豆秋。発
行所、大阪市阿倍野区旭町二の一
一〇木村十悟方、川柳雜誌社阿倍
野支部。

★著者は路部門の逸材。川柳不朽
洞会員。
句集
第一巻 川柳大学
★本句集は大連川柳会を主体に、
内地柳人を変えた二百三十作家の
作品集である。句は一人七句乃至
八句が発表されている。
★大正十五年八月五日発行。B 6
版、二三〇頁。定価一円五拾銭。
発行人、大連市須磨町二十二番地
中沼若葉、編輯人、大連市西公園
町一四五番地、大島謙明、発行所
大連市西公園町一四五番地、大連
川柳会。
★異域同舟作家の作品集だけに、
大正末期の句風の一端を知ること
が出来る。

釜ヶ崎への郷愁



東野 大八

大阪のstrom街釜ヶ崎で、三日間にわたる警官対民衆の大騒ぎがあった。

くそつたれ、警官がなんやそんな民衆の怒りがこんな形をとつたのだ、と率直に私は感じて、ありそうなことだよ、と人にもいった。

地場のやくざや手配師のせん動だともいっているが、そんなことだけで釜ヶ崎の民衆は、あんなには出ないのだ。それを私は知っている。私もここに、わずかながらだが住んでいたことがある。

「人間横丁」の「大阪の灯」でも書いたが、売春婦おかねさんとの出会いもここが舞台になっている。

私の居たころの釜ヶ崎は、今のようなstromの広地域ではなく、むしろこじんまりした、サビトタシとポロ厩とおはぐろどぶの一面だった。それは飛田遊廓や安工場ながら、いくつもの板住切、トタン仕切りの仄っぱを抱いた工場群

がそこそこあったからだ。

ライオンハミガキの点つた通天閣横の国技館を出ると、霞町の向うに鉄道線路を持った、すすだらけにペンペン草の生えた汚ない土堤があった。その土堤が一方を阿倍野へ、今一方は踏切をへだてて今宮の俗にいうガード下があつた。

中山太陽堂の赤レンガの工場が、いかにも今宮らしくすすほけて建っていたが、そのへいつづきの切れたあたりは古着屋で、そこで私は、おふくろが苦勞して夜なべに作ってくれた木綿の綿入れを二円五十銭で売りよばし

「おかん、かにしてや」と一つ三銭の大福を七つも食つたことを覚えてる。

おかねさんと出会つた三河屋のとなりの、下駄箱の古手みないな木賃宿はオカマたちの巢で、昼日中から金ダライにタオルやししゃぼんを入れて、ぞろぞろ風呂に出かける姿をよく見かけた。

メーデーのあつた日、私はデモにまぎれ込んで歩いてるうち、二人の男にいきなり両腕をとられ、横丁に引きつり込まれた。そこにはトラックが止まつていて、うむをいわさず、なかばほうり上げられるように車の中の人ごみにつき込まれた。

恵美須署の広庭に車の上の連中はぶちあけられて、人心地がついたらカスリの着物の肩に白ボクがついてた。デモにもぐり込んだ私服が、ウルサそうな奴に目印をつけた。そのチョークの白いのが、何かの拍子に私にもついてしまったのだ。少くとも警官側の白ボク作戦を知つたあと、私はそう解釈した。なぜなら、私は思想的にも行動的にも何一つまともなものもたない、単なる気まぐれの一浮浪者にすぎなかつたのだから……。

「査公奴、偉張つてケツかる、ここへくるならサーベルの一本でもへし折つてやればよかつた」そういつて大ムクレしているのが、よくみたらオカマの一人だつた。

ウサン臭さそうに、まるで泥棒ネコか、カツ病みのように私たちを虫ケラ以下に扱つたその時の警官たちの権べいずくを、私はいまも忌々しく思い出す。奴等はそんなときみんな、鼻の下にヒゲを生やし、何かといえはこづいたり、蹴とばしたりした。どれもこれも、光つた本革の黒い長靴ばかりだつた。

た。「泣く子と査公には勝てんのんや」

オカマの一人がそういつてうらめしうにトラ刈りになった頭をなでた。デモの手入れといつしよに、オカマもついでに持つていかれ、商売用の長い髪を、みんなバリックでガリガリやられたためだつた。

今もそうだろうが、釜ヶ崎や今宮には、すじ金入りの社会主義者たちが多かつた。汚いインテリ風、ただそれだけで尾行がつき、光栄あるリストに載せられたりした。

おれの地下足袋の中でこおろぎが啼きさんこ玉むかしをきけば流るるみぞれ降るその立ん坊のナワの帯

件で、そんな句を作つて釜ヶ崎の暗い灯の下に坐つて私を思い出す。遠い遠いそれはむかしのことであつたが……。

随つて、釜ヶ崎事件は、他人こ

とでない、身近かな事柄として私を寂しい思いに引き入れる。「strom街をなくせ」

「山谷や釜ヶ崎の暗い人間の谷間を無くそう」

何党の代議士が知らないが、こんなことを気やすく、また政治家らしい大まかな感覚で無責任に言つてのけていられるけれども、日本の現実、そんなことで一朝一夕にカタのつく問題ではない。がめつ奴こそ、本当の人間らしく、いつも非常な真実を前に置いて生きている。それは正常な人間たちからすると、あんまりほめた話ではないのだけれども。

自分の身体一つしか、きめ手のない人間ほど、底ぬけにそばくで、そのかわりに真剣なほど一途で、よそ眼からみるとなんとユーマスなことか。それが何をいっても私には懐しいのである。その下手な見本の集りが釜ヶ崎だ。

何をを選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券をお贈りするのにも心に
くい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

高島屋
大阪・東京・京都
なんば日本橋
なんば四
大東 東 京

特集 西成の怒り



IKE

おれ達も人間だぞ！

後藤梅志

米騒動を始めとして、貧民の騒動というものは、不景気のどん底に起きるものだ。それが所得倍増で、お金が儲かって、可笑しくて可笑しくてたまらない、猫の手も借りたというこの時代に、突如として釜ヶ崎の一角に大騒動が起きた。これは一体どうしたことだろう。先ず諸君は、こうした疑問に包まれるにちがいない。

私は特別に貧民というものに愛着をもっていた。殊に釜ヶ崎一帯の住民は、世間で考えるほど無法者であっても、悪人は居ないのだ。豈二枚に三人ずつ寝る。働いてとった金は奇麗に其の日の内に費やしてしまう。酔っぱらえば往來でも寝て仕舞う。腕っぶしの強い兄んちゃんに擲られたら、文句があつても「ハイ」とかんにあやまる。こんな人種に悪人などは無

いものだ。まして反乱性などがあつてたまるものではない。

この可愛らしい貧民はまた、あの可憐らしい貧民をはじめ、東田町の（ひがしだちょう）東入船、西入船から萩の茶屋へかけて櫛の歯を引く様に並んだドヤ街の商人にとつては、とっても有難いお華客さまなのだ。食う者、食われる者が、ゴチャ、ゴチャと並んでいて、主として釜ヶ崎はこんな人達で構成されている。

ノミシラミ南京虫に例えられ

つくづく思うことは、人間は、腹の立つ時には思い切り怒らなければいけないということだ。全学連が国会へ暴れこんでも怒ろうともしないし、あの不可解な松川事件の判決をきいても国民はおこらない。敗戦以来日本人は怒りを忘れた国民になつてしまつたよう

だ。ところがこの釜ヶ崎の連中はそうでなかつた。遂に怒りがバク発した。私は嬉しくてうれしくてた

不快指数が爆発した。それは西成の暴動と関係がありそうだし、しかし、目に見えぬ暴動や、その動向の監視等にもあるようだが、

西成に住む作家に、釜ヶ崎を山崎の目で見えたらどうなるか、つたのがこれだ。——編者誌

まらなかつた。テレビのニュースは全チャンネルを廻してみた。新聞は取る手おそしとムサボロように騒動記事を読んだ。だから事件のあらましはよく知ることが出来た。恐らく諸君もよく承知だろう。赤い血の夕立が降つて来たようなものだ。恐らくは、昭和年間

のピククニュースになるにちがいない。

ステテコにシャツのこれが暴徒かい

私は三日目（八月三日）のあさ、東入船町に西川晃さんを見舞つた。そしてくわしい話をきいた。二た晩と眠れなかつたというが逞しい同君はちつとも被れた様子も見せなかつた。木屋さんの方は上がつたりだつたらしいが、正月だと思えば諦めもつく、何より鋭い観察眼をもつ同君のきびしい批判を聴いた。私はその足で、焼打された交番や、ドヤ街の隅から隅、穴だらけになつた西成警察署、阪堺線の石ころ道などを見てあるいた。これがあの荒れ狂

った暴動の街とは思えない静けさだつた。鳴りを鎮めているかたちである。恐らく今晚（三日目）がヤマだろうと晃さんと語つてきただけに、その静けさはむしろ無気味だつた。日雇いは影も見えない。働らきに出ているのか、昼寝をしているのか、そこらに見るのはドヤの主人に、パンパンくずれでもあるのかしどけない女、小女のたぐいであとは見物人ばかり、殺氣立つたところはどこにもない。これが夜になるとどこからともなく人が集まり三千人、四千人、それが次第に狂暴になつて行くのだから恐いのだ。こんなところにも西成のこの一帯の特異性がある。私は石ころを一つ拾つてみた。阪堺線のレールのまわりは石ころばかりだ。恰度投げころで手応えがある。きつとキヤッチボールでもしているつもりで思い切り投げたにちがいない。何しろ圍の街と云われる位だから、夜になるとそこらは暗ら開だらけだ。投げた石ころは、阪堺線やそこらの裏手にくさるほどある。家は低いし、ドヤの地元で、地理には明るい、暴動を起すにはあつらえ向のような気がした。

が、然し可哀そうに、お前達の暴動も今夜限りだろう。何しろ六千人の警官が、交代で昇寝をして今夜に待機しているのだ。実力行使をせぬという筈はない。憐れさはその無智だけではない。その貧困さにあるのだが、と私は低徊去るに忍びぬ想いがした。

交番は新しく立派なものができると、焼打されるのが運命のようだ。東京の山谷もそうだつた。事件の発端になつた東田町の交番は、見るも無残というより、コンクリートのリッパな外側だけを残して、一物も残さず焼けている。よう焼いたものだ。警察の紋章だけが残っているのも物哀れだつた。廻りの人家に火がつかつたのは不思議な位だ。

今度の騒動で女子供に死人やケガニンが出なかつたのは偶然ではなさそうだ。主義者らしいものもいたが大したことはなかつた。

西成警察署の屋上には、大きな照明燈があり、聴音器がいくつも並んで、物々しい警戒であつたが、事件は、白昼夢の如く、また夏の夜のショウに近いものであつた。何故にこの事件が起きたか、何がたかかくの如く騒ぎが大きくなつたか、私は道々考えた。

これは単なる事件ではない。否、釜ヶ崎だけの事件ではない。否、釜ヶ崎だけの事件ではない。官民相剋というか、割り切れないものが底にひそんでいて、民衆を怒らせてしまふのだ。日雇いといえども自分の命（いのち）に關することには真剣だ。

目の前で自動車に轢かれ置き去りにされた、まだひくひくしている死体。「はやく病院へ運こべ」

「なぜ車は来ない、お巡りは何を
しているんだ。」
「こんなにしてたら、助かるのん
も助からへんやないか」
「日雇いだって人間だぞ」
「一体おれ達はとうなるんだ」こ
んな気持ちをつら民衆が怒るの
もむりは無い、原因はここから始
まったのだ。

だが、交番を焼いたからとど
うなるものではない。皮肉にも宿
直室の畳だけは、表が少し焦げた
まま水に濡れて残っていた。

交番は焼いたが畳だけのこと
り

(八月八日)

釜ヶ崎暴動事件

西川 晃

私の川柳メモ

火炎めらめら群集を狂気にし
火だるまの無人車園を突つし
る

警官数千あおそれなのに無警察
暴徒より世論の方を警戒し
アイモ持つ新聞記者暴徒に包圍
され

手をつないで夫婦で見てる野次
馬

石拾う女の背ナで子がわめく
弾薬の石は女が運搬し

警戒の隙間をおんな偵察し
休戦の間を悠々ハイヒール

木刀を握り我家は死守する気
天を焦がす嗚呼思想なきエネル

ギ一
ハンバンもオカマも今日は休業
し
ラーメン一杯で警官終夜奮戦し
路で寝る巡査へ夜ルが白みかけ
その朝もバタ屋はゴミ箱あさつ
てた
釜ヶ崎良民が居ぬわけなし
ひどい目に遭うのはいつも良民
だ

人間というものは無限に複雑な
意識と至極単純な行動をもつ奇妙
な動物である。そして人間の心の
裡には、生れながらの教習と善意
があると同時に悪と愚昧さが無気
味に巣くついている。現在の日本
は、その悪と愚昧さによる背徳の
みがいはずらに拡がり、人間の善
意は次第に影を薄くしているよう
に私には思われる。これは私が釜
ヶ崎というスラム街の一隅に住ん
でいるからそう感じるのではな
く、紳士面をしている上流階級と
かインテリとか言われる人達でも
一皮剝くと、無思想と道徳心の缺
除が浅ましく露呈されるので、善
良な仮面の下に背徳の生活がある
ことを否応なく承認せざるを得な
い。だから今度の事件も、単に釜
ヶ崎のみの特異現象として其の原
因を解明しようと思っても恐らく
真相は掴み得ないであろう。
日本人の大多数が腐りかかって
いるので、其の膿(うみ)が釜ヶ
崎という社会のウィークポイント
に溢れ出したのだと私は考える。勿

論、釜ヶ崎が社会の病巣部であつ
たればこそ暴動がこのように大き
くなったのではあるが、その窮極
的な原因は、現代の日本にみなが
破綻的な空気を法を軽視する精
神にあつたのだと私は判断する。
(個々にはもつと悪質な行為が、
毎日のように日本のあらゆる場所
でおこっている)

此の事件の発端となつた問題の
交差点は、私の店から僅か二十米
東の地点にあつたので混乱を極め
た三日間を通して常に私の店によ
ッソカのように娯集した群集によ
つて包圍されていた。私は二階の
窓から丸三晩、徹夜で乱斗の状況
を見守っていた。窓ガラスや戸を
毀されるぐらひは仕方がないが、
もし放火しようとする奴があれば
飽迄も阻止せねばならぬと、手に
しっかりと木刀を握りしめて、素
破といえは二階から暴徒の上に飛
び降りるつもりであつた。「数
千の暴徒にむかつてたつた一人
で」とその無暴を笑われるかも知
れないが、此の小さな店も、私と
私の家族が生存する為にはかけが
えのない岩なのだから、警官が守
つてくれなければ自分一人でも防
ぐしか仕方がないと思つた。事
実、暴動の第一夜、第二夜は完全
に無警察状態だつたのである。

た、消防士は命から逃げるのび
た。群集の一部は猛り狂つて完全
に暴徒になつていった。それは暴力
革命を思わせる凄まじさと熱にう
かされたような不気味さをあらわ
していった。然し中心を少しはずれ
ると大部分は怖いもの見たさの野
次馬であり、又事態の推移を気づ
かつて見ている良民であつて、そ
れ等の人達の中には私の知つてい
る顔も少くはなかつた。誰が暴徒
で、誰が野次馬で、誰が暴力団
で、誰が良民なのか全く訳の分ら
ない。こゝんがらかつた渦の中で騒
乱は次第に熱を帯び、興奮した群
集は次第に乱衆と變つていった。
然し私は始終冷静であつた。暴動
が最も激しく行われているとき
も、それ程の恐怖心は持たなかつ
た。且ての長い戦場生活の経験
が、私にこんな落着きを与えたの
であらう。然し最悪の事態に備え
て、大切なものは全部纏めてしつ
かりと版に巻き、持つて出られる
ものは荷造りして一カ所におい
た。子供達にもそれぞれ覚悟を言
い聞かせ、各自の取る行動につい
ても充分理解が行き届くまで教え
た。私は最後迄この店を守るつも
りであつたが、三人の子供を連れ
た妻が、果して暴徒化した此の大
群集の中を無事に脱出できるかど
うかと考えると、せめて子供達だ
けでも疎開させておけば良かった
かなと、後悔らしいものが時々私
の心を曇らせた。此のようになつ
て、暴動のあつた三日間は私にと
つて、戦場再びに我によみがえる

すばらしい
心地
着
蝶
欠
シャツ
CHOYA
SHIRT CO. LTD.

物だとおだててくれましたが、この風鏢には金が多量に含まれているので非常にいい音色が出るのです。私が数年前に病臥した際、老妻を枕辺へ呼ぶのに、南洋の藤でこれを叩いたものです。私は骨董品を所謂骨董品扱いせずに、すべて実業品として扱うことにしています。永年使用している箸なども愛護に行つた時に、張家口で手に入れたもので、蒙古の大人の使用していたものです。普通の箸よりズツと長く、箸を入れるサマはベッコウと象牙で出来て居り、象牙には彫刻がしてあります。この彫刻は鼠の歯で彫るのだそうです。そして野外で兎の料理をするために箸と並んで小刀がついて居るのです。そんなものでも大事にしまい込まずすべて実用に信用しています。

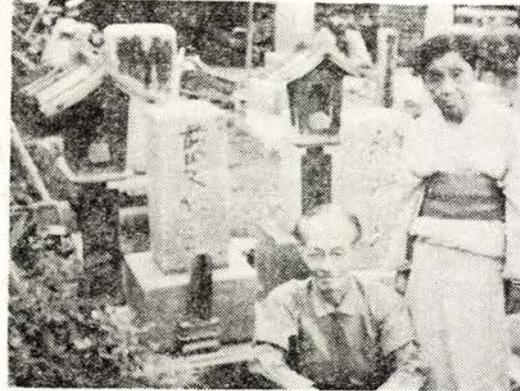
その後、すばらしい翁（おきな）の面も買いました。アゴひげが長いので柱懸にしてよこんでいましたが、これは前号で紹介した宇喜多翁の肖像が出来た際、宇喜多翁の温顔そっくりなので、お祝として翁にもらつてもらいました。大街道から少し横に外れたところだつたと思いますが、その店はなかなかいいものを蒐めていましたので、川柳で来るたびに、ひそかに足を運んで、財布をスツカラカンにするか、時には借金をして帰つたものでした。私の古本漁りは別として、こんな道楽のあったことは、おそらく誰も知らないだらうと思います。とにかく松山は忘れられない街です。

伍健の墓前で

宇喜多秀徳翁の肖像の台石の存在をたしかめてホツとした私は、その足で三越へ出かけました。狸通君から昼食の招待をうけていたので、三越で待ち合わせ一緒に出かけることになりました。

自動車が玉川町二丁目へさしかかった時、この明楽寺に、伍健さんの墓がありますと聞かされたので、すぐくるまにストップを命じました。

墓地がお寺のすぐ左り横にありました。随分乱雑な墓地でしたが、前田家のお墓の文字は伍健君の筆蹟に相違ありません。在命中に、ご先祖を思うて、ここへ前田



た。墓石の背後へは廻つて見ませんでしたが、位牌が墓前におかれてある位ですから、まだ墓石の背後に刻まれるまでにはなつていないと思います。

伍健君が亡くなられて、僅に一年余りなのに、常に多忙な私たちが夫婦が揃つて墓参するといふのも、奇蹟のよきな気がしています。

伍健君は香川県坂出市の出身ですが、君の生涯の半ば以上を松山市に住み、生え抜きの松山っ子のような存在で、松山市の名物男でした。人づきあいはよかつたが八方美人的ではなかつたと思ひます。それに人一倍の謙讓家でした。

句は多作の方でした。画も巧くて垢抜けがして、丸味のあるペン字のようでした。踊りも巧みだったので、野球拳を創作したことも偶然ではありませぬ。実業野球で伊予鉄の応援団長として甲子園に

来たこともありますので、その間もいろいろな野球のそんなどころから野球のそんなどころから野球のそんなどころから

の損失でなく、柳界にとつても大きな損失でした。

墓参の用意のない私などはあたりの掃除をして故人の冥福を祈つたに過ぎませんでした。君の墓前で撮影できたのはせめてものなぐさめでした。

(以下次号)

呼ばれる安宿はこの辺りだけで三百軒もあるそうだが、その半数くらいは許可もうけないアイマイ宿らしい。この宿賃が部屋割の割には家外高い。一泊百円ときけば安いと思われても一カ月分なら三千円、ちよつとした公営住宅に入れる金額である。一日働いて三、四百円がよい部類だといふ人達にとって相当な負担となる。宿賃を払って、屋台で飯をくい一ぱいひっかけたらフトコロは何れども残らない。だから布団のいらぬい夏場は燻耐でも腹に入れて道ばたでゴロ寝した方が安あがりといふことになる。

一日稼ぐ、めしを食つて酒を飲み、寝る、一文なしになつて仕方なく働く。この循環が果しなく続く、そこには生活設計もなにもない、全くその日暮らしである。この悪循環をどこかで断ち切らなければこの人達は永遠に救われな

長い貧乏自分の姓名さえ忘れかけ
文無しでまた西成へ舞戻り
今晩も男は益み女は売りに
出かけた

こんどの大きな騒ぎの中で特色と思われするのは、事件が空前の出来事にかかわらず、暴徒に依る婦女子に対する暴行が一件も無かつたという点、日頃暴力をたくましくする暴力団が暴徒に組していな

いということである。
ここにも暴力団は本来右翼的なものであり、権力に味力するのが

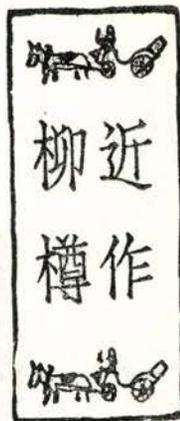
彼等の本質であることをパッロしている。
そして今度の事件が世をあげて笑ひがとまらないと云う、好景気の時代にとつたことも、不思議といえは不思議である。
もう一つ大きな特チヨツは、暴動に参加した群衆の意識の在り方である。この人達は、自分が何故騒いでいるのか、また騒がなければならぬのか、無意識のうちに行動する自分の行動が、なにに依つて決定され、なにに依つて支配されているのかを考えたことはな

言いかえれば、群衆の一人一人は自分の行動の目的を自覚してないといふことである。
にもかかわらず、この人達の集団行動（無意識的行動）はチツ序正しく、一つの目標に向つて進んでいることである。今度の事件をつぶさに考えると、そこには明きりと社会進化の大きな役割である権力への斗争ということが打ちた

てられているのである。
今度の事件は西成界わいをテーマにして作句している私に、いろいろな面から、豊富な材料を提供してくれた。その点では望外な取

カクである。
事件そのものは、どこまでも日本資本主義の終期に於ける必然的な現象の一つに過ぎない。この事件をケイキに私は再び、想を新にして「西成界わい」の作句を続けることを決意した。

暴力追放通天閣の灯が暗い



麻生路郎選
北川春巢選

内閣改造積木の色を変えただけ 福岡市 田口 麦彦

庶民たのし真夏のタイをしめす

ガム噛んで待つ愛人もガムを噛み

恋人と来いと貸ボートがならび

けだものの眠りさましに来た酒場

同権のしあわせに酔う中ジョッキ

侮った天気予報で荷を濡らし 京都市 大久保 和太郎

解禁日 働く竿と趣味の竿

同夜の鉦しめらぬ程に長生きし

同かながきの母の手紙に輪がのり

同寝苦しさお隣りの児も泣いて居る

無重力圏へ行きたい事ばかり 青森県 木村 涼人

同リバイバルジャズにされてる枯 京都府

同いけそうな人刺身から箸をつ

同 陰電気満つグラマーの夏姿

同 奥さんが欲しい老嬢の自炊なり 西宮市 樋口 寿栄

同 きゆうくつな着物に替えて夕涼み

同 闊志捨て切れず栄転の人送る

同 顔色で秘書は晴れたり曇ったり

同 他人様のための嘘ならうまく云え 日南市 護川 梢月

同 冷蔵庫月賦で買うて麦茶入れ

同 倦怠期電化のレジヤ持てあまし

同 やった金で奢ってもらマ札を云い

同 まま母の顔色読んでぐれ始め 玉野市 小谷 仙山

同 海青し心の傷を捨てに米る

同 蛙の子蛙で有って気に入らず

同 ゆうれいが馬鹿にされてる涼台

同 汽車通る前で悠々用を足し 兵庫県 遠山 可住

同 大阪を目指す西瓜がよくふとり

同 親死んですねの細さにびっくりし

同 収入を云って妊婦のまだ勤め 大阪市 川口 弘村

同 バス空いて車掌は女の目に戻り

同 上らないものは小さくなるムード

同 階段が動いてほしい肺活量 兵庫県 杉本 一鶴



温情あふれる

祈とう録

三嶋美笑の妻

角 シゲ子

路郎先生からお便りをいただき
感涙にむせびました。お便りはす
ぐ仏前にも伝えました。さぞ悦
んだことと恩います。

路郎先生にご心配いただきまし
た祈とう録は永遠に仏前に供えて
おきます。柳の昔様のご厚情は
忘却いたしません。

日赤へ入院いたしましたのは一
昨年九月でした。肝硬変で腹水
がたまつて自由がきかなくなつた
からでした。病氣は以前に出来て
いたのですけれど、その後、昨年
六、七月頃には腹水も減つてきま
したし、散歩ぐらいすこし出来る
ようになっていました。八月には
盲腸と脱腸と二回も手術をしまし
たが、あまり疲れも出ないよう
でしたけれど、十一月頃から寒い季
節に入つて、ときどき熱が出てき
ました。再び腹水がたまり出し、
今年一月に入つてからは、はげし
く腫れがたまり出しまして、一週
間おきから四、五日おきというよ
うに水をとりつてもらっていたので



何様ぞ連日見舞客絶えず	同	梅雨荒れて庭木を蛇が渡るなり	同	里田一十
厄除けの煙手うちわでよせる	同	相談をしてから蟻は木に登り	同	
仁術の医者算術が達者なり	大阪市	浴衣会恥を知らない名をつらね	同	
総辞退なんて中元辞退せず	同	皺くちやの札で借金返しとき	神戸市	岩井 干甫
海行かばくらげ山ではバスの事故	同	マッサージで皺のはす気か根気	同	
奥さんの主人主人が鼻につき	鳥取県	雨の音やけに聞える妻の留守	同	
女から地球の上に朝がくる	同	裏庭は草の繁っている役所	竹原市	杉原 愛鳩
葬式で後妻のことをもう話し	同	汗をふきふき律義な夏羽織	同	
機姫の募集に見えた低姿勢	滋賀県	ささやかな遺産嫁った嫁まで狙い	同	
叱ってはいかぬとPTAの講話	同	グワッしてもダフ屋と云う目付き	西宮市	末沢 花美
蛙族の大合唱に田植すむ	同	夏菊のやっぱり白を愛す人	同	
農場のオアシス鎮守様涼し	愛媛県	アルバイトないかないかと回復期	同	
売り物と云わず娘を連れ歩き	同	人の世は山あり坂あり串カツ屋	大阪市	木村 草々
珍客にまともに向けた扇風機	同	だんじりへ表通りとしての寄附	同	
たまに飲むビール長男ついでくれ	竹原市	借金に追われてる夢水枕	仙台市	平野 光道
授業料せめてキチンと子に持たせ	同	妻の乳房萎びて家計いそがしい	同	
兄ちゃんのお古ヤンチャに云い	同	冬物の展示冷房へ逆な文字	松坂市	羽根伸太郎
パラチオン特攻精神見つけた	兵庫県	梅雨明けへ中元戦のアドバルン	同	
青汁ブーム牛の胃袋一つ欲し	同	麵へ長いイヤリングはずしとく	西宮市	松島 光一
朝顔の憎い隣りへ向いて咲き	同	暗がりでおにいさんとはわしかな	同	

すが、そのたびに衰弱いたしました。

リングル注射も三カ月、一日に注射四、五本ぐらいと新薬も次ぎ次ぎと使っていたので、ゼヒ全快を祈ったのですけれど、四月頃には医師も見込みがうすいように申されておりました。

四月に入ってから米子の小西雄々さん、湯原一机さんが見舞いに来てくださって大変よろこび、大切にしていた川柳の本をすべて披露会の役に立つたらと差し上げました。

それから須崎豆秋さんがなくなられ、六月八日には「豆秋さんをしるぶ会」へ電報をしてくれるようにと申しまして、この次ぎはオレの番かも知れぬと、自分でも死の予感がしていたのでしよう。

こうして六月二十八日の晩には食事もらぬと申して十二時過ぎ、どうも呼吸が苦しいから看護

福壽丸

心斎橋筋大丸前
電話 三三四四番



何時の世にインスタント化する役所 守口市

樋口 一峯

幸せのためならしましよ廻り道 愛媛県

藤原 君子

豆萩先生へ

告白をする気かやたら爪をかみ

同

川柳雑誌社特製
書きよい 美しい

千年の寿命も及ばぬ句を残し

同

お見合に眼鏡が母の気に入らず 兵庫県

斎藤たけお

挨拶の長さあらいの氷解け 大阪市

藤富 淀月

順番をまた間違えて一人逝き

同

ステテコで飲めばビールが腹に み

同

日歩三銭なれど新築心地よし 香川県

三井 酔夢

他所の目に幸せすぎる悩みあり 見島市

伊丹柳瓢子

酔いつぶれよろめく筈が寝てしま

同

貯めている淋しさ子供めくまれず

同

塗下駄の音聞えそうな法善寺 布施市

坂上山椒坊

荷員車寝押ししのズボン皺にさせ 笠岡市

松本 忠三

隠居部屋 まのようにお茶を入れ

同

御無沙汰は結構ですと医者の方

同

高校の兄ちゃんの知恵借りるババ 和泉市

末田 晃康

べそかいて戻 は泣き度い母は留守 高知県

山川 勝子

総入歯カチカチならして綱をたて

同

命あるおかけ寝て見るテレビ相撲

同

機嫌よい時はこはんの出来もほめ 愛媛県

村上 竹生

すすり上 ぎ食うそうめん庶民性 大阪市

堀 風仙洞

よろめいた昔もあつた父頑固

同

めうと扇子片方かけたままのこり

同

知恵の輪のもつれるよ ま子の寝相 出雲市

中川 晃男

高い高いすれば孫めに顎蹴られ 伊丹市

小川静観堂

したいこととして神棚へ手を合わせ

同

小児マヒへ大映しされた油虫

同

肥料車のうしろで信号赤になり 大阪市

指吸 拳児

顔に似ず冷たい事を云う女 鳥取市

近藤 昭夫

葬儀屋はガムをかみかみ橋建て

同

お芽出度い酒だ沢山飲んでやれ

同

やめさすかやめる お椅子守り抜き 河内長野市

森本黒天子

定年へセンチになれの表彰状 金沢市

山本 木象

首切りはないぞと白髪までつかい

同

斗病の心みだれる赤いバラ

同

祇園鉾見に出て汗の一張羅 大阪市

加川 大然

夏はよし裸のような奴とビール 須崎市

高橋 蟠蛇

手花火の親子へ愛想して通り

同

夏枯の仲居に仰山来て飲まれ

同

手をつなく恋を見流す輪になり 松山市

沖原 光雄

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴)三〇〇円
送料(一冊分)二〇〇円

「もうよいからな」と云うことは
を最後に、四時五十分にはすべて
のお別れとなってしまいました。
子供は二人男子ですが、上の三人が
満洲で死亡していますので、
現在、中学二年生、小学六年生
で、もう十年は生きていないと子
供が成長出来ないかと常に申してお
りました。

私も五カ月は病院につききり看
護していましたので子供は親類に
あずけておりましたため、最後の
お別れに会えず残念でした。死亡
後解剖がありました。肝臓は普
通の人の半分より小さく、かた
く、ブツブツが出来ておりました。

角氏は私の生家の姓ですが、角
の墓にうめてくれと申しておりま
したので本人の希望通りにいたし
ました。

多くの人から愛されていた
ので惜しまれて逝きました。一年



適齡期とつくに過ぎたマニキュア	同	鳴野ひろし	回覧は海水浴にゆけという	松江市	岡崎	雪美
婦唱夫随主諾々目刺焼く	同	越智 一水	美しい自信カメラへためらわず	七尾市	松高	秀峰
ようように石油コンロを買う文化	同	耐え忍ぶ母へ逆う娘に育ち	耐え忍ぶ母へ逆う娘に育ち	芦屋市	三上	笑路
喧嘩ではない土建屋の話し声	同	新装のスードベンキの派手な色	新装のスードベンキの派手な色	宮崎市	野口卯之助	
路郎先生を道後に訪問	同	預金三十万オールドミスは微動	預金三十万オールドミスは微動	大阪市	西木	保夫
師に酌をされてビールの泡がもれ	同	八つあたり暖簾のような妻を持ち	八つあたり暖簾のような妻を持ち	玉島市	田辺	好女
幸福とは犬の尻尾のゆれに似る	同	用事しか話せぬ様な秘めた恋	用事しか話せぬ様な秘めた恋	西宮市	鶴飼	鮎子
元かけた息子気ままに親を捨て	同	愛してなんかいません刑事部屋	愛してなんかいません刑事部屋	大阪市	中岸	雄水
二重丸つけて負けてる出馬表	同	ボーナス期昨日も今日も展示会	ボーナス期昨日も今日も展示会	奈良県	木村よしを	
道路工流した汗を酒にかえ	同	梅の実がうれて幼き頃思い	梅の実がうれて幼き頃思い	大阪市	稲森けい女	
叱られに行くのに一張羅を出させ	同	酔い過ぎる世へ行く事ばかり云い	酔い過ぎる世へ行く事ばかり云い	鳥取市	岩田八文銭	
デパートの車向いのドアが開き	同	ライバルのおしやれへ妬心燃える	ライバルのおしやれへ妬心燃える	玉島市	井上	旭峯
生ビール地下よりビールの上で飲み	同	道頓堀で妻が喰べたい中華そば	道頓堀で妻が喰べたい中華そば	大阪市	福井	火水
もう笑いとばせるほどに貧続き	同	計画構想夢想と続く倍増論	計画構想夢想と続く倍増論	豊田市	飯野仙台子	
活字のようにゆかぬ作家のとつ弁	同	老いては子にドドンパを教えられ	老いては子にドドンパを教えられ	岡山県	久戸瀬春光	
寝て起きて狭い我が家の有難さ	同	茶の間から柏鷲組むを呼び込まれ	茶の間から柏鷲組むを呼び込まれ	神戸市	吉田	隆史
十年の倍増待てぬ年令であり	同	他力本願法にすがって生きんとす	他力本願法にすがって生きんとす	ハワイ	宮政	周防
外遊で裸の大将にも悩み	同	本心を出さず停年来てしま	本心を出さず停年来てしま	小松市	月田北海坊	
金魚売り呼ばれて低い声となり	同	冷奴四角にしやんと無抵抗	冷奴四角にしやんと無抵抗	岡山県	鳥取	周防
触れる手を待てるような襟化粧	同	涙線は弛緩し続ける母映画	涙線は弛緩し続ける母映画	神戸市	波多野	
菖蒲湯につかって病を捨てた顔	同	母娘して食う素うどんに味があり	母娘して食う素うどんに味があり	宇部市	神田	豊年

残暑御見舞

九カ月あまりの入院生活に痛い注射も全快したいばかりにと、看護婦さんにも常に申しておりました。

皆様的心からなる祈とう録のお名前を拝見しながら、今更ながらに美笑は幸福だったと存じます。

入院後の句と思いますが、病院の隅に悲しむ人だまりいつ死んでよい息の根が切れず

子供から見ればバカげた父であり

四月ごろの句に、城山の桜よりさきさきさようなら。

木 口 賀 峰

吹田市松ヶ鼻一三三七の六
電大阪七五二一〇番

残暑御見舞い

申上げます

亡天三嶋美笑、病氣平癒のため、川柳雑誌社の皆様から祈とう録をたまわり、厚く御礼申し上げます。

いっさい御礼状を差し上げるところ、誌上を拝借して重ねて厚く御礼申し上げます。

旧姓三嶋

角 シゲ子

評句

リレー



柳井市 大坂市 大坂市 大坂市

弘津柳慶 増田耕民 黒川紫香 眞鍋一瓢

インターンの鉢巻だけが板につき 麦太郎

柳慶—実習生で、まだ一人前でないのに、鉢巻だけは一人前以上だと、ひにくった句だが、中七の「鉢巻だけが」で最初は流行のデモの鉢巻と感したが、手術などで、髪がバラツクので、ナイトキヤップのようなものをして見えているのを、鉢巻と誂んだと見れば見えないこともなく、この句動く句として頂けない。

耕民—此の句の焦点は中七の「鉢巻だけが」にある。家習生の身でありながら争議の鉢巻は一人前で勇ましい姿だと皮肉って居る。然し職務上鉢巻のようなものをして居る場合があるから動く云えは云えないこともないが、それは飽きでも職場の服装で、当然のこと「板につき」と強調して居る以上は、斗争の場合と見るべきで社会の尊敬する医療の職場にも時代の波が押しよせて居る一面を感じさせる。そうした意味で一応頂ける句だと思ふ。

紫香—下五の板につきが強すぎるとは思ふが、適当な言葉が浮かばないが、もう少し柔い表現でもよいように思ふ。どちらにしても当世の一断面を句にしただけで、も少しの迫力がないように思ふ。それだけに読む人にとって動く句にもとれ動かない句にもとれるようだ。

一瓢—青婦睡眠、青年行動隊などと、悪く云えばまだ思想のかたまりない連中を煽動して、陣頭に立たせる、老獪で卑劣な老左翼共が、どこかの職場にも奮めて居るものだが、此の句の場合インターンと云う特殊な存在を捉えている処に面白味がある。病院の入口に堂々と立てられた赤旗さえ一部の人の鬘を整を賣う風景であるのに、ストの陣頭に勇躍しているインターンの姿は、果して仁術的な精神が見出せるだろうか。将来患者となつてこんな先生に体が任せられるかとの杞憂を持たずに居れるだろうか、と云つた事さえこの句から読み取れるように思ふ。

柳慶—「板につき」で、私はどうやら手術に対しての、鉢巻が板についたと見えるのです。デモの鉢巻であれば、紫香さんの言われる通り、板につきが、あまりにも強調過ぎると思ふ。一瓢さんの言われると、煽動で、陣頭に立たせられると、見るのは、この句の表現では、あまりにも、読者の、厚意ある見方で、それを誂めば、この句も生きて来たと思ふ。

耕民—仁術的な立場にあるべき医療部面にも時の流れは浸透し、やがて其の部面を担当する卵であるインターンが鉢巻をして闘争の第一線に立つて居ることは、病む人々の目にどのよう映ずるか患者は勿論一般人の不安と驚きは深刻である。其の点を表現する上に「鉢巻だけが板につき」と強く云つた方が効果的のようにも感ぜられる。いずれにしても時代の一断面の描写に過ぎぬのだが、それが医療関係と云う特殊重大な断面だけに一寸引かれる点がある。

景を句にしたものだけにいろいろと問題も多いようだし、一般にも親しめる句とは云えないと思ふ。時代の感覚で斗争の意味が弱くなつた時この句も力弱いものになつてしまふ。

一瓢—彼等の前身は全学連で非現実的な抽象論を押しまくつて、社会革命のバイオニヤを気取つて見たりしたが、卒業すればただのインターンで現実の世間を見る目もまだ開けていない。たまたま起つたストの波へ水を得た魚の如く躍り込んで、お手のもの鉢巻姿には一種の憫情をさえ置さずのではないか。句として構成も時代感覚も上乘だと思ふ。

大臣の目に俺たちは数字なり

柳慶—代議士時代は、皆んなが尊い一票に見え、頭も低いが、一度大臣にでもなるものなら、天下を取つた気持で、故郷に飯つても、そっくり返つて、我々の方がペコペコする。国会でも農基法の質問に対し、俺たちを数字として、のうのうと答弁している、大臣と言う地位に対し、心の中でふんがいしているものの、反抗も出ない人間性の弱点をついているが、この句にそのいきどおりが、ヒシヒシと感ぜられないのは、大臣の目に、の目が弱いので、むしろ大臣から見れば、とすばり言い切つた方が、いいのではないだろうか、しかし下五、数字なりは川柳

家の見どころ。紫香—大臣でなくても代議士は我々を数字としか思つていないだろう、併し何んでも数字で割り切りたがる現在の世の中ではこれも無理ないと思ふ。中句の俺たちはの俺たちが一寸言葉が荒うすぎて気になる。この句の作者自身も少しひがんで居るように見える。我々は、と云うような表現でもいいのではないか。

一瓢—遠大なる視野、修辭表現の心槽いまでの巧みさ、私はいつもこの作者に敬服している。がこの句ちよつとどうかね、一国の大企業でも大企業の社長でも末端の人事など、数字以上に見てないんじゃないか、共産党は細胞だと云つて居る。だから此の句から受ける感銘は「そりゃさうだ」である、人間の限界である精力的な問題だね。

柳慶—数字にしか見ない相手に、対し、むしろ、我々では弱い、いきどおりを、ぶちまけて居る句であれば、「俺たち」の方が句に強調があつていい。この場合、代議士でも社長でも、いけない、大臣とした所に此の句は生きて来たと思ふ。

耕民—修辭表現の巧みさ一応この句の境地はうなすけるものがある。大臣にしる代議士にしる、はた又大企業の社長などが末端人事を事務的に数字以上に見てないのは確かである。これは又無理ない点もある。然し政治的な面ではこの数字をう軽視出来ぬ高い識見と

良識の上で、主権は俺たちにあると云う自覚に立ったとき、教の上で彼氏達を叱咤することも出来るこの意味で、政治家の最高峯である大臣をすえた方がいいと思う。「俺達は数字なり」と云い切ったところに軽視されて居る怨瀆も感じとれる。

紫香一冒頭に大臣と打ち出した点は私も意義ない、「麦飯を喰え」と云われる時代だから、我々を数字として扱われるのも止むを得ない。唯コマ以下に扱われたくないと云う願いがこの句に表れているのではないか。

一瓢一句の筋金をはっきり観念的であり、奥行きがない。こうした状態を詠んだ句では可成りの鋭さがないけれど、ピンと来ないのではないか。大臣、代議士を諷刺した句は今までもワシツとあるので……。

三人姉妹男兄弟より稼ぎ

ひか平

柳慶一三人と限定した所に、何にか意味があるのかと言えば、そうでもない、たださんに姉妹としてもいいのではないか、最近は、なんとか姉妹とかで、かせぎ廻っている流行歌手もいる、それをもじった句であれば、尚のことだ、三人とあるから、男兄弟はそれ以上いて、どれも働き甲斐のない連中だと、無理に考えさせるのであれば、表現方法を変えろべきだ。いずれにしても、ありふれた句。

紫香一三人姉妹に大した意味はないかも知れないが、私はただ姉妹とするより三人姉妹とする方が強いように思う。姉妹それぞれ職業が違っても知れないし、大阪の漫才かまし娘のように三人一組と云うのもある。昔とちがってこの頃は女の方が割合よく稼ぐ。がめつきも男以上だ。とに角男の稼ぎより女の稼ぎの方が表面に出易いので云った句が出来たのだと思う。私は面白い句だと思つた。

一瓢一私には分らない、三人姉妹、又男兄弟が何を暗示しているのが分らないのに批評するのは、ほんとに盲評だ。失礼。

柳慶一面白い句だとは思われない、三人姉妹とした意味が、何にかを強調しているのだから別だが、此の句からは何もそれを感じとれない、ただ数字を入れて見たと思われただけだ。

耕民一柳慶氏の御意見全く同感である。表現の方法を今一度研究して頂きたい。

紫香一この句では三人姉妹と云う三人にこだわる必要はない。浮世の裏面面と思えばいいと思う。兎に角男に昔程の腕も力もなくなつた事が感ぜられる。

一瓢一と、紫香さんはおっしゃいますがね、若し川柳に手を染めてはやはりの方に説明したとしますと、「じゃあ三人姉妹でも女きょうだいでもいいじゃないですか」と、私なら云いかねません

が、私に云わせると、句を構成したのも三人姉妹であり、この句の偽になっているのも三人姉妹だと思ふ。

廻り椅子めつたに窓の方向

敬太

柳慶一課長の椅子は窓を背にして、課員をニランにしている、真実一途で、課長にまで昇進した男、たまには廻り椅子をグルリと廻して窓の外でもながめて、一服する位の余裕もあつてこそ、課員もなじめるもの、一日中真正面ばかり、にらんでいたのでは、本人も疲れるし、課員もかたくならざるを得ない、課長の人となり、課員の心理がつかめて、私の好きな、いい句。

紫香一柳慶さんの云われる通り、こんな課長だったら課員もやり難い事だらう、この句だけでは廻り椅子の主が何者であるか判然としませんが、部長であれば窓の外をながめる位の余裕があるだろうし社長だったら尚更であるので、柳慶さんの判断は正しいと思う。然し如何に仕事の虫である課長でもたまには窓を向いて頭を休める事もあると思うし、思いにふける事もあると思う。私は、「廻り椅子たまには窓の方をむき」とした方が面白いのではないかと思う。

一瓢一「姑の日向ぼっこは内を向き」を直ぐ連想出来るので一寸気になる。だが姑の日向ぼっこは一日中やっている訳もなからうし

廻り椅子は、勤務時間一ぱいである。他に一面精神的な体質で、ねばり強い生真面目さ「ああ、あれであの地位までのし上つたんだ」と尊敬的な目を向けているんだと想像出来ない事もないようだ。

柳慶一紫香さんの言われる通り、たまには窓の方を向く位であればいいのだが、そうでない所に、此の句の見付所であり、人物が生きていて。中七で「めつたに」で、時には窓の方もむく事もあるが、それは、一日に一回位、なにかの拍子に、チラッと見る位のもので、一瓢さんの言われるように、部下が、尊敬的な目をむけているとは、思わない、むしろ、息苦しく感じているように見える。

耕民一廻り椅子だけでは課長であるか部長であるか乃至社長か明かでないが紫香さんの云われるようにまず課長が適當のようである「めつたに」で日に二一度位は目をなすことも出て居る。真面目一方の堅さ一事が万事それ式である事も連想出来る好い句だと思ふ。

紫香一生真面目と云うより何か変人的な匂いがする。課長になれば次は部長であり、重役に昇進するかも知れない。清濁併せ呑む位の度量が出来てもいいのではないか。この句では部下が批判的な立場にたっていると思う。

あつて、もう今じゃ古くさい感じがするし、句自体昭和三十六年型じゃない、一応小がたくまとまつた感じはするが、新鮮味が足らないようである。作者は非常に若い方であり、将来を曠目されている方だけに特に、古い型を破って、独自の境地を開いていただきたいものである。

○

なんの鈍かる女の名前すぐ
覚え
柳慶 仕事をさせれば、ろくな仕事もしない、課長からも、課員からも、少し鈍いんじゃないかろうか、と思われている男が、どうしてどうして、女の名前だけはよく



コクヨ 便箋

続・川柳料理暦 (四)



秋の味と茄子

台所なすびの色で今日も明
け 茄子の色変りますわと起こ
される 竹 莊

茄子にはいろいろの種類があつて、初夏の初茄子から晩秋の辛子漬にするような小粒のものにいたるまで夏から秋へかけての野菜の女王のようなものであるが、特にうまいのは夏より秋茄子がうまい、だから昔から、「秋茄子は嫁にくくすな」という、ことわざがある位だ。焼いても、炊いても、揚げて、漬けても、よいのが茄子だ、特にむらさき色のつやのよい色を消さないで、揚げたり、煮るのが、コツである。京都の名物に味漬けがある。これは加茂茄子を薄く切り、紫蘇、唐辛子、茗荷などと一緒に塩漬けにしたもので、御所むらさきといわれる美しい色に染まっている。

しぎ焼き

しぎ焼には面白い話がある。

水谷竹莊

昔、ある歳の秋に、山東京伝の家に客があり、昼飯のおかずには、茄子のしぎ焼を出した。すると客がこれを見て、

とて

京伝直ちに返していわく、油つけくしをさしたはよけれど

色の黒いに味噌をつけたり 軽妙洒脱の受け流しの妙ともいえる。

しぎ焼きは皮をむいて、輪切りにしたのを、油をひいた鉄板で焼きつけ、生姜醤油を添える、又、まるままの茄子の両面に角度を避えて庖丁目を入れ、串にさして油を塗りながら焼き、火が通ったら、たっぷり大根おろしと花がっおと生醤油で食べる。手早く作りたい時は油で揚げてもよい。

尚、田粟にしたい時は、茄子の油で揚げたのに、白味噌をつけ、おろし柚子をバラツと、ふりかけ風味は格別である。

古川柳にも、

田楽へすいつけに来る夕す
ずみ
ぬかみそを里のおふくろ米
ていじり
めし粒のように油を髪へつ
け
料理人切合うような音をさせ

てんぷら

てんぷらはなんといつても万人向きの、うまいものの随一であろう、てんぷらと、すき焼きは日本の二大料理として、世界中のどこの人にも食べさせても、喜ばれる国際的な料理ともいえる。海老の天ぷらは別格としても秋口になると、そろそろ、ハゼ、アナゴ、メゴチなどが出てくる。日に増し秋が深まるとシヤコよし、イカよし、ハシラよし、白魚よし、灘の甘い酒と、揚げたてのえびのはの秋の味覚の玉座ともいえる。酒といえは、さかな、ビールだと塩豆とかピーナツ、チーズ等々だが、あつさり揚げたての天ぷらに食塩を、一寸つけてたべるのは乙なものである。

古川柳の酒の句を拾ってみたら
一たいは下戸さと赤い顔で
いい
神代にもだます工面は酒が
いいり
詩の出来る度に徳利が軽く
なり

むかい酒などと飲む奴道理
つけ
飲まぬ客時々客に時を聞き
飲まじすぎ且那は供をもて
あまし

生酔を鬼かと思う女連
生酔いがのめめと来る翌
る朝
乱酒には唾のようなり下戸
の客
足留に盃ばかり出しておき

酒の肴

酒の詩人、若山牧本が「秋の夜の酒はしずかにのむべかりけり」と歌っているように、酒のシーズン、秋から冬へかけての季節で、それは気候が適しているだけでなく、前年に取入れた米の後に仕込んだ酒が、充分に熟成して酒倉を出て、新酒として出廻るのが秋だから、酒のうまい季節でもあるのである。俳句の方では新酒とか今年酒とかいうと秋をあらわす季語になっている。

古川柳に、
八文は味噌を片手へ受けて
のみ

というのがある、昔居酒屋の酒は一合八文、味噌をなめなめ飲むのである。その時代、例の二八そばで一杯十六文だから、酒はうどんやそばの半額で飲めたということになる。

では肴ということになると「味噌を片手へ受けて」飲むことも出

コーヒの味

モダン 川柳

心 齊橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL 6684

御集会には階上御利用下さい



知っている、この道にかけてはベテラン、こんな人間は世間には多い、君達は彼を鈍い鈍いと言っているが、何んの何んの、女の名前を覚えるのは天才だよと、第三者が見た目として頂戴。

紫香一ねそが事をすると云うたとえがある通り、鈍い男でもこう云う事は別。なんの鈍いものと上五にもって来た手法は面白いと思ふ。天才と鈍才は紙一重、まして女の事にかけての天才はうようよしている、パーやキャバレーへ一度行っただけですぐ女の名前を覚えるのもあれば、何度いってもすぐ忘れるものもある。こんな人は女に無関心かと云うとそうでもない。ただその人その人の感覚の相違だと思ふ。句全体としては普通の句。

一瓢だんまり○○、むつり○○と云うのがよくある。その口だと思ふがとも角面白い、軽妙なユイモアの句である。誰にでも作れ

来るし、贅美をつくしてうまい山
海の珍味を並べても、まずい場合
もある。鉢の木の最明寺入道北条
時頼が味噌肴に飲んだ節儉美談
があるが、現在でも、東京のそば
屋では、つき出しに鉄火味噌を出
すし、大阪でも、酒の肴に、モロ
枳瓜といつてもろみを出す店が多
い。酒の肴といえは、うに、塩
辛、このわた、からすみ、焼海苔
等々、塩の辛い泥鰌だつて酒の肴
にはなるのである。秋が深まると
松茸、しめじ、又は、栗のキント
ンなど、甘いものも乙なものであ
るけれど酒の肴はアッサリしたも
のがいいというわけでもない、健
康のためには、脂肪分をなるべく
とるように私はしている。ロシア
人はウオッカという物すごい強い
酒をアイグイ飲むが、前以つてパ
ターの塊を吞込んで胃壁にパター
の屑をつけておくそうである。

日本でも焼酎を飲むには、う
にや、からすみより、モツ鍋など
の方がよい。九州では、豚の角煮
のようなコッテリした料理が好ま
れる。飲み物によつて違つた肴が
ほしいものであるし、好みにもよ
るが、揚げたての天ぷらなどは、
酒の肴にする事は健康上にもよい
ということになる。酒を飲めば当
然酔うが、これが微酔くらいなら
いいが、乱酔となつては始末が悪
い。

生酔はおどかさようなあく
びをし

つばきしてあるくがひどく
酔つたやつ

芝居の丸橋忠弥の堀端の場面、
赤垣源藏の、徳利別れ、先々代左
困次の当り役、「大杯饒酒戦強
者」の馬場三郎兵衛が大盃を一口
息に呑みほして面目をほどこす等
は、酔つた事に好感をもたれる、
黒田節にも唄われている。

酔えばまた十八番の黒田が
し
しかし酒好きは酔つたと思わない
酔いはせぬとは生酔の文句
なり
酔つてるもんかというのはキマリ
文句でもある、それも
生酔も顔の赤いはこわくな
し

で青白くなって目がすわつてくる
と、これは要心しないと、からん
だり、けんかしたり、乱暴した
り、まして
関取りの生酔ねっから手に
おえず

で空手チョップでもやられたら目
もあてられない。酒も適量を過ぎ
てはいけないと百も承知しなが
ら飲む程に、酔うほどに、ついつ
い快調になつてしまふものである
。そして翌日は三日酔で頭がい
たいとシュンとなるものだが、
又、忘れてしまつて飲みたくなる
ものである。

まだなにかないかと晩酌酔
うていず
酒と肴はもちつ、もたれつ、互

に相手を引き立てて、しかもコン
然一体に融合する夫婦のようなも
のである。

飲んでほしやめても欲しい
酒をつぎ
朝酒にほのぼの海が白らみ
たり
花の寺酔えば祈願の身も忘
れ

霞乃句集 福寿草より。

現代柳人録

- (一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
- (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月

- (82) 藤井好浪
- (一) 藤井貞造 (二) 好浪 (三) 好浪
- (四) 京都市東山区本町一六
- (五) 明治28年3月10日 (六) 京都市 (七) 無職 (八) 〇五七〇五番 (九) 愛の果へ自動車横に着かぬなり (一〇) 羊に関するもの、木版刷物ビラ (一一) 現在無し (一二) 大正五年

- (83) 黒川紫香
- (一) 黒川増太郎 (二) 紫香 (三) 紫香
- (四) 豊中市曾根東町六丁目三三曾根住宅九一四〇六 (五) 明

治40年8月12日 (六) 大阪市北区 (七) 阪急電鉄資材部倉庫課長 (八) 大阪二二五一 (九) 戸を開ける音さえ違ふ長女次女 (一〇) 旅行 (一一) 有 (一二) 昭和五年頃

- (84) 木山遠二
- (一) 木山四二 (二) 遠二 (三) 遠二
- (四) 岡山県笠岡市山口 (五) 明治31年2月1日生 (六) 現住所に同じ (七) 農 (八) 一 (九) 女房に買取られたまんま老い (一〇) 尺八・俳句 (一一) 有 (一二) 大正五年但し大正十二年より二十五年間を中絶 (在鮮中)

- (85) 西いわを
- (一) 西岩雄 (二) いわを (三) なし (四) 大阪市東住吉区桑津町七の二二 (五) 明治37年1月15日 (六) 和歌山県白浜町 (七) 会社員 (八) 74八四七三 (九) 蠶ほど良きものはなし寝ころぼん (一〇) 音楽観賞・小唄・登山・旅 (一一) 有 (一二) 昭和十年頃

- (85) 中島小石
- (一) 中島寿代 (二) 小石 (三) 小石
- (四) 堺市浜寺諏訪森町西四丁三七二 (五) 明治40年3月10日 (六) 東京都 (七) なし (八) 塚 (九) 八二四・一七二五 (九) なやみもつ胸に青空青すぎる (一〇) 茶・舞踊・小唄・日本画 (一一) 有 (一二) 昭和二十一年

それで気付かなかつたと云う処か、手法も巧みである。柳慶「なんの鈍かる」の上五がよくきいている。耕民「鈍くないことの証明に女の名前をすぐ覚える事を持って来て居るユーモア、笑わずには居られない。そして軽くまとめられて居る。結局巧みな手法である。どこの職場にもこのような人が居るものである、そしてそうした人柄故に人氣男にもされて居る。紫香「たしかにこの句のような人は親しめる人に違いない。時にはユーモアを飛ばす言葉も出るだろうし、警句も出る、或る程度人間が出来ているのではないかと、柔い手法で表現しているのはいかと思ふ。」

一瓢「作者自身これで「生命ある句」を完成されたとは、思つていられないだろう。軽味とユーモアの小品の句型、皆さんで云いつくされているようなので、毒舌のみ。(担当・真鍋一瓢)

ヒゲそり後に...

●美容衛生剤G11配合
●アラントイン
●水溶性

男性 200

アスリム



路考

富士野鞍馬

「路考」というのは、江戸時代大好評の女形俳優、瀬川菊之丞の俳号で、初代から五代まで、何れもこの路考を俳号とし、時には看板にも表示されたのである。屋号は浜村屋で定紋は結綿であった。

古川柳には、団十郎について多く詠まれているが、それが何代を詠んだのかはつきりしないまま評釈されているので、路考五代を考証して、それぞれにあてはめて解釈を試みた。

初代

初代路考、浜村屋吉次が、正徳二年（一七一二）に、大阪の八重桐座へはじめて出勤した時、京都の俳人仙鶴が「瀬川菊之丞」と改名させたと伝えられている。それは、

昔、瀬川采女が朝鮮へ従軍していた時、その妻の菊が手紙を出した。その手紙が秀吉の目に触れて、その誠をほめられ、采女一人が、先に帰国を許された。という故事を引いて、女形の名にふさわしいとしてつけられたといわれている。

「ひらかな盛衰記」の悔が枝が手水鉢を打つ型は、この初代路考が創始したので、
むけんをば三百両に菊之丞
(万宝一〇)

菊之丞金子の儀にて身もんだい
(万宝二三)

と川柳に詠まれている。三百両は、無間の鐘を撞く覚悟で手水鉢を杓で打つと出てくるのである。
また「道成寺」の桜子も好演であったので、

たばねのし釣鐘堂にのたを打ち
ち (タル 二)

と詠まれ(宝暦十三年)「東ね熨斗」は定紋の結綿がそれに似ているので洒落たのである。

二代

二代目は、王子路考といいい、初代の養子で、王子、岸村、百姓の息子であった。一説には下婢にできた子だともいわれているが、川柳はいずれも王子生れにしている。

百姓の作り上げたる菊之丞
(拾 九)

女かた王子を出て速からず
(拾 九)

王子から大明神はいひはじめ
(タル八八)

おとなし川の近所からせ川出
(万安 四)

などと、王子を流れる音無川にかけても詠まれ、「大明神」という愛称があったようである。

女形といえは、上方俳優と
きまっていたところへ、二代

目路考は珍らしく江戸生れであったので、その人氣は大したものので、初代をしのぎ、路考といえは二代目だけというほどであった。

きん玉の有のが路考ふそくたり
り (拾 九)

いっそもう路考が出るといっそもう
(拾 九)

と大評判で、美人娘を「路考娘」などというほどで、
路考にもおきおき負けぬ嫁をと
(拾 初)

と川柳になり、

路考下さいと王子でそそりもの
(タル一六)

と、王子金輪寺で売っていた「五香」といいまちがえたほど有名であった。

路考茶が秘蔵と見えて鈴をふり
(タル 六)

「路考茶」という染色が流行した。この句は、死んだ娘の路考茶の着物が、お寺の天蓋になつて鈴がつけられていることを詠んだのである。
瀬川艾で日三里の旅お山
(タル一四八)

路考が元祖という「瀬川艾」が、日本橋十軒店瀬川屋儀平から売られ出されてよく売れた。

金元は綿を抜くならいやといひ
(タル七〇)

「結綿」は菊之丞の定紋で、一座から路考が抜けるなら金元もいやだといったのである。

肝疾患・疲労・二日酔

★総合強肝剤

ウロコ印

リポコール (12種の成分を配合)

20錠・50錠・100錠

坂田製薬

綿の出る藩へ出にくい半四郎
(万明 五)

と、五世岩井半四郎も一流の女形であったが、路考には一目おいていたようである。

三代

三代は仙女路考といわれ、二代の養子で、大阪道頓で十五才で初めて江戸へ下つて、市村座から、瀬川路考之助といつて出た。

橋中からおんなの仙人が出る
(タル二九)

と詠まれている。「橋」は市村座の紋で、中国の傳説、橋の中から碁を囲んでいる二人

の仙人が出たという「橋中
仙」の故事に附会している。

橋中の座でひろめたる仙女香

(タル八八)

「仙女香」は、南傳馬町三丁
目坂本屋から、瀬川菊之丞の
名で売り出した白粉である。
それを市村座の舞台からコマ
ーシャルしたかも知れない。
そして三代は後に俳号を
「仙女」と改めた。

もらひけり結繩つて三代目

(万宝十一)

という句があるが、三代目で
養子になったのは安永であり、
この句はそれより十五年
も前に作られているから、二
代目王子路考の思ひちがいで
あろう。

四・五・六代

四代目は、猿屋路考とい
い、文化九年(一八一二)十
一月二十九日に歿しているか
ら、次の川柳は何れも文政の
作で、五代目を詠んだものと
思われる。

一丁目千両花道の菊之丞

(タル九二)

菊の紋多門のころも小手がき
き (タル九二)

浜々と多門をはめる御さい連

太棹はちとそぐなはぬ浜村屋

(タル一一八)

五代目は、多門路考とい
い、文化十二年(一八一五)
十一月に相続したのである。
その「多門」を、端女や楠正
成にかけて洒落て作られてい
る。太棹は、その当時の事件
を何かにおわせているように
も感じる。

天保三年(一八三二)一月



七日三十一才でなくなつた。

のどけがる空や無明の多みさ
まし (タル九二)

がその辞世で、死に絵が三十
路考

五万枚も売れたという素晴し
い人気であった。

(タル一一八)

六代目は、現代になって、
大正七年に瀬川菊之丞を相続
して、前進座に属し健在であ
る。本名瀬川豊太郎、明治四
十年生、岩井兼三郎の弟子で
あった。

☆☆☆

川雑ジャーナル

本社新選者

決まる

「あとで芽をふけ川柳」と、毎年
川柳忌に発表される本社新選者
に、つぎの人々が選ばれること
になり、女流作家では山川阿茶女史
ただ一人で、木村十哲氏、伊達塚
子氏、早川清生氏、本多柳志氏、
樺薫風子氏らは日頃の精進がみと
められ、その識見とその情熱に大
きく期待が寄せられ、こんごの句
会に誌上にその活躍が楽しみであ
る。

年今からみて30才以上二人、50
才以上四人だが、20代の選者が出
てもいい時代ではないか。

(F)

第十回・大阪市民文化祭

短歌大会

- ▲日時 昭和36年10月1日(日)午後一時半
- ▲会場 毎日新聞大阪本社講堂(市電桜橋)
- ▲講演 「転換期の詩歌」 安田章生
- ▲出詠 楷書にて未発表の新作一首を原稿紙に住所氏名と共に明記、百円添付

第九回・大阪市民文化祭 俳句大会

- ▲日時 昭和36年10月21日(日)午後二時
- ▲会場 朝日新聞大阪本社講堂(市電肥後橋)
- ▲講演 「俳句と現代詩」 小野十三郎
- ▲出句 楷書にて未発表の新作二句を原稿紙に俳号と共に明記(住所と本名は括弧内に記入)百円添付・三句以上は没。

文化の秋におくる作品展

二家族づれでお越しください

会場 大阪梅田・阪神百貨店三階丸善画廊

(電話第二七八七番)

会期 10月5日(木)10日(火)まで六日間

自午前十一時—至午後八時

作品 短歌・俳句・詩・川柳作家新揮毫作

品 (半折・横物・色紙・冊・陶器其他)

頒価 売約に応じます。会場係に御申出下

さい。

短詩文学作品展

(第五回)

主催 関西短詩文学連盟

後援 大阪市教育委員会

送り先・大阪市北区中之島 大阪市民文化祭
「短歌」「俳句」大会係宛、締切、9月7日着限
▲主催 大阪市・市教委・関西短詩文学連盟
▲後援 毎日新聞社・朝日新聞社



入門 講座

研究題「汗」

清水白柳

いつも句を拝見して感じる事でありすが、どんなに巧みに十七字を挿って句を作って居られても、生活を素材として作句して居られるからには、そこに作者の生活感情が盛りこまれて居らない句でありますと、人をひきつける作品にはならないのであります、つまり作者が作句意態をもやした程には人を感動させることが出来ないものであります。

すが降りた途端に汗が出るのはだけれし経験することですから、これだけでは報告に止まってしまいます。歌声止めての句は、サイクリングであることは判りますが歌声止めてで坂路か何かを感じさせようとしたのではないかと思いがすが、止めてという語はそれを感じさせません、歌声かすれとか何とか別の表現がほしいと思えます。

汗をかきかき発車ベルへ走りかけて来たと一目でわかる顔の汗 千甫
ハンカチを振って別れて汗を拭き 光道
汗をかきかきの句はその通りであります汗をふきふきとしますと少しは作者の客観的な感情が現われて来るようです、もう一歩す

すめて汗をふくひまもない様子を句に現わしたいものです、かけて来たの句は中七の一目でわかるに冗長な点があるようです、この七文字を有効に使うことによって句が活きてくると思われれます、ハンカチの句は下五の汗を拭きという語句によってその別れが夏であることや振ったハンカチで顔や首筋をふくという、着想の佳さを面白くと思いました。

A 汗臭いからとて妓遠くいる T
B 汗臭いのも忘れてる好きな仲 T
C 汗の匂いわざわさかいて顔 T
D 汗臭いシャツが触れ合う町 T
工場 ひろし
Aの句はいかにも作られたという感じがします、遠くいるという、わざとらしさが目につきます、それに汗臭いのがお客だとしませと、この妓の態度は以っての外ということになります、Bの句はそうであろうと想像して作られた句の匂いがします、作者がそれを羨んで作句するのでしたら、好きな仲という下五文字は失敗していません、再考したい句であります。Cの句は稚拙な感じであります、その者の感情が顔を出しています、それは、わざわざという四文字に現われているのであります、Dの句

の町工場は少し大き過ぎたようでありすが、これでいいと思えます、CとDの句には真実味があるといえるのであります。

1 調教師の競馬と共に流す汗 Y
2 八百長とも知らず手に汗握って観 G
3 手に汗をにぎるスリルがやみついた 雄水
4 手に汗を握っただけで損をする 保夫
1の句は調教師の汗を見つけた年ら競馬と共にと当り前の事をいって凡句になって居ります、調教師の汗を躍動的に表現出来る語句を考える努力が足らなかつたようです、2の句の八百長とも知らずが説明調にしています、八百長とだれでも知っているわけではないのですから、とも知らずは要らないのではないのでしょうか、この六文字を活かす工夫をしてほしいと思いました。3の句の口語調がこの句をどうやら救っているようでありすが、若し、スリルに病みつかれとしますとだれでもが一度は句にした経験をもって居られると思うからであります、4の句、下五文字の損をするという動かない字句がこの句を活かして居ります、余情といいますが、この句の持っている背景の大きさを人に感じさせる巧みな句であります。

A 同情の汗までかいたお人よし Y
B 汗を掻く人で信頼される人 豊年
C 善人らしい鼻の頭に汗をかき 静水
Aの句の同情の汗が作者以外にはピンと来ないと言えそうです、それは同情という中の広い言葉を使ったために焦点がボヤケタということになったようです、焦点をシボルという句になると思いました、Bの句Cの句ともに善意の句であります、Bのやや物足りない表現よりも、Cの鼻の頭の汗を面白く思いますが、そこに信頼出来るよき隣人を見出すことが出来るからであります。

A 先生も父兄も子供の事で汗 H
B 参観日先生も汗かいたはる 弘村
C 参観日先生の汗 親の汗 同
A、Cの句は事を現わすのに親切すぎてその通りですと言うだけの句になって居りますが、Bの句は先生もという使ひ方によって、父兄の目も、児童の目も表現されていると思われれます、然しこの句からは作者の感動を受けることが薄いようでありすが、
手に汗を握って昼寝の子が起きる H

枕敷帳覚めて匍い出た鼻の

汗 八九寸

おしつこでないかと汗の子を起し 岡甫

三句共着想の古さという事が言えるようです、勿論着想は古くても表現や感覚に若々しさを盛り上げる意欲が必要なことは言うまでもありません、例えば次の句、

軽羅の君両腋下に地図画く 八郎

汗はついぞかきませんわと冷たい女 静観堂

作者は年輩の方でありますが作句に苦心して居られる様子には頭が下ります、前の句の着想は古いのですが表現方法に苦勞して居られます、併し下五の地図画くは失敗であります、上五文字の物々しさにくらべて、それにそぐわないのです、もう少し気楽に、私ならば「帛皮にりするもの汗浸み通り」とでもするでしょう、後の句冷たい女は感覚は面白いと思いましたが、感覚の句のむづかしさは、作者の意図するものが、そのまま受けいられるかどうかという点にあるようですが、冷たい女が汗をかかないというやや常套的な手法に落入っている点が弱いと思われま

1 社長室出たとたん汗どつと出る M
2 上役に見せたい汗が出て嬉

実男

3 汗かきは案外上の目にとま

り 句念坊

4 汗ばかり流れ仕事ははかどらす 南宗
5 作業衣へ天地に愧じぬ汗が滲み 和三郎

1の句は実感の句であろうと思いますが、社長室でなければという決め手が無いのが弱点であり、2の句は出て嬉しとあまりにも楽々と結んでしまったので浅い句になってしまったようです、3の句の上の目にの上が面白いと思いましたが、漠然としているようでそうではなく、たしかなものを持っていて、4の句は表面的な表わし方で句になっては居りますが、深さを持って居りません、これのもう一歩ふみこんだ句を期待して居ります、5の句は大上段に振りがぶった大時代的な句でこの句は成功して居ますが、いつもこの調子で成功するとは限りませんから氣をつけてほしいと思いま

1 汗拭きの看護婦も要る手術室 美由起
2 療養の汗を看護婦拭いてやり 尚史
3 汗拭いてあげると婦長背にまわり 一鶴
4 おちこんだ胸へススーと汗がより

5 病み上り食事するにも汗をかき K

療養と汗の句であります、1

の句の手術室は冷房装置のない病院の一面を風刺して居ります、2と3の句はそうした事があるというだけで汗を拭いてる方も拭かれてる方もその感情が通じて感じることが出来ません、4の句は仰臥している病人の汗を、じかに感じます、それはその実感がススーという現わし方によって訴えるからであります、5の句は病み上りの弱さを決定づけるものが現われて居りません、食事するにもそれを現わすつもりでしょうが、それは感じられませんが、病み上りの動作を他の事柄に依った方がよかったのではないのでしょうか、

愛着が土に代々汗そそぎ 辰始
農家の土に対する愛着を句にして居られます、これで悪いと言うのではありませんが、大きな事柄をつかんで十七音字にまとめてありますので作者の感情があらま

ねぎらいえもう一息と玉の汗 辰始
は、よいと思えます。御苦勞様と声をかけられて、もう少しですからと汗を流す気持が快よく人にひびいてきます、玉の汗がよいと思いましたが、ねぎらいえは、が止

いと思えます。

式の帯とけば我慢をしてた 大然

着想の佳さによって成功した句であります。花嫁に対するゆたかな人間味を感じさせます。出るだけの汗出し切ったさわやかさ 豊年

何もかも言い切ってしまった句でありながら、そこから何かしらほのほのとしたものを感ぜさせるのも真実味の強さといえます。パトロール背の汗など気にしてす 初甫
ふところへ風を入れてる背の汗 同
パトロールの句はこちらから見ただけの句ですが、ふところの句は自分がいまふところをあけているように感じさせられるのは、これも真実味ということが出来るよう

汗もせずお金の欲しい人がおり 岡甫
人間の心を詠んだのですがあまりに事柄にはなれて詠んだので深さを感じない句になってしまいま

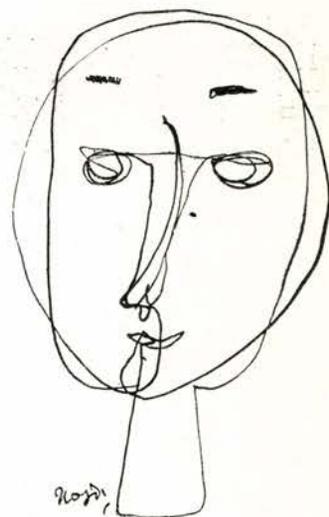
一買えず 勝子

扇風機も買えない家庭がたくさんあるのに、クーラーもまだ買えずと詠まれていることによって、

生活環境の良さを感ぜさせられます。実感の貴とさがつくづく思われます。汗をふきふきセールスまだ 初心 光道

上七文字の汗をふきふきは動かないと思えます、そのセールスマンの初心さをいかに描き出して居ます。汗を拭くついでに肩を叩くとき 弘村
面白い句だと思いましたが、試合の時か何かで、しっかりやれよと肩を叩くのが目に見えるようです。流汗淋漓論未だやまず 高志

情景をいかに描き出して成功しています、作意と表現がピッタリしていて人に真実味を感ぜさせるのであります。次回研究題 「読む」
切 九月二十日
発表 十一月号の予定
宛先 大阪府南河内郡美原町 丹上四〇四
清太 白柳



倦怠期

大鶴喜由選

倦怠期茶碗の音にも唄が立ち 翠児
 立話しよくして帰る 倦怠期 周甫
 云い分がどちらにもある倦怠期 翠光
 倦怠期どちらともなく嫌になり 亭
 倦怠期一期に燃えた恋の 萍 好女
 あけすけに誰はばからず倦怠期 葉太郎
 倦怠期ネマキの柄が派手になり 雄声
 それとなく大にもわかる倦怠期 淀月
 倦怠期子供も二派になって採め 十九平
 インスタント料理がつづく倦怠期 同
 倦怠期知らずに済んだ律義者 愛鳩
 朝帰り云わず問わずの倦怠期 千甫
 火遊びを見て見ぬ振りす倦怠期 同
 ささいな事でもめてる倦怠期 美由起
 妻は妻夫は夫のデイトあり 酔夢

一路集

倦怠期のうさを屋台の灯に散らし 弘道
 倦怠期峠を越せば更年期 迷路
 倦怠期夫婦茶碗が気に入らず 山椒坊
 里の母に倦怠期だと笑われる とん智
 倦怠期夜中に帰る日が続き 秀峰
 倦怠期浴衣に糊がきいていず 実男
 倦怠期男そろそろ地金出し 井蛙
 生活に追われ忘れれる倦怠期 祥月
 気晴らしに旅に出て見る倦怠期 雪美
 倦怠期せつせと小金貯め始め たけを
 お帰りを知りつ夜着を引つ被り 圭井堂
 倦怠期だんだん鏡へ遠ざかり 古心
 浮気だけはしちゃ駄目と倦怠期 ひか平
 スタートから間違いやと思う倦怠期 保夫
 襟垢を見せて女の倦怠期 卯之助
 白粉の曇もひからび倦怠期 和二郎
 生活にゆとりそろそろ倦怠期 ひろし
 倦怠期うちの女房は強いなり 徹也
 そろそろ倦怠期だろうと仲人が来 恵二朗
 三つ折はもうつきません倦怠期 同

母ちゃんば倦怠期と娘が見ぬき 季費
 倦怠期隣りの夫婦けなるがり 魁水
 ポーナスにちよつと笑った倦怠期 火水
 黙んまり茶碗へだまて飯を盛り 勝子
 倦怠期山のいで湯でより戻し 句念坊
 人事課のリストにのぼる倦怠期 万古
 倦怠期ささいなことで家を出る 照児
 ナグジエーもつたいなくも倦怠期 宗太郎
 よその奥さんが素的に見える倦怠期 雄々
 三人目生んでこじれる倦怠期 光一
 倦怠期転んだままのこけし棚 仲太郎
 倦怠期無断で故郷へ帰つとり 静水
 ちくはぐに腹を立ててる倦怠期 むじな
 倦怠期なんにも云わず聞きもせず 草々
 死ぬとまで云われて嫁たを倦怠期 九呂平
 夫婦とも浮名を立てて倦怠期 兎康
 倦怠期女も飲んでみたい夜 花姜
 倦怠期ネオンあやしく美しく 同
 倦怠期このごろせんさくきつくなり 瑞歩
 倦怠期気まぐれに見るストリップ 旭峯
 生あくびかみころし合う倦怠期 どんたく
 よろめいてよいかと女房おどしかけ 弘村
 貧乏が救つてくれた倦怠期 圭木
 倦怠期今日も屋台の灯がまねき 雄水
 倦怠期友の家を泊り歩き 孝風
 倦怠期 佳
 あの傷にまたまた触れる倦怠期 隆史
 そう云えば少しはあった倦怠期 曉明
 倦怠期背中合せでまだばやぎ 光福
 倦怠期何思つか濃い紅 愛鳩

倦怠期小出しの愛で乗り越える 好女
 久しぶり枕も交さぬ倦怠期 一編
 倦怠期アクビも同じ時にする 鮎子
 倦怠期別居はやはりいやと言う 尚史
 倦怠期死ぬほど愛した方なのに 山椒坊
 では別れようやと倦怠期 八九寸
 倦怠期採みはぐしてると、風呂 生薑
 かえことをしてもええと倦怠期 同
 子が無けりゃ別れてますの倦怠期 代仕男
 倦怠期ふと味気ない世に思ひ 蜻蛉
 隣りがすんで今度はいちの倦怠期 初甫
 人
 倦怠期たがいちがい家に空け 藤波
 地
 倦怠期お茶ならガスに掛けておす 和二郎
 天
 家広過ぎて倦怠期長く 光道

品質優良
先カワペン
 TACHIKAWA PEN
 タチカワペン
 タチカワゼム
 タチカワ画紙
 大坂市東区常盤町一丁目十一番地
 立川ペン先株式会社

ボート

八木摩天郎選

SOSボートに群がるエゴイズム
 ボート漕ぐ僕にバラソル廻り君
 すれ違ふボートに彼女乗つて居た
 かなづちの癖にボートに乗りたがり
 妻の漕ぐボートぐるぐる廻り出し
 本命のボートエンコをしてしま
 ボート漕ぎもう豆の出た不甲斐なき
 眼を皿にポリスボートでストロール
 アリバイの中に馴染の貸ボート
 オールの手やすめ川面の涼を入れ
 ボート屋は二人の仲を知っており
 密談のボートは波に浮いたまま
 ボートから派手に手を振る女連れ
 ボート屋の専主にアロハ顔がきき
 又眼鏡でボートの恋は眺められ
 塗りだのボートお堀に客を待ち
 求婚のチャンスボートの手を休め
 帰えらざるボート求めて立ちつけ
 艇身差つけてオールの息を抜き
 貸ボートだれに気兼ねいらぬ恋
 打明けるつもりオールを休めたり
 ボート屋のペンキが匂う浜開き
 オール持つ手は口ほどにない男
 サングラス女ばかりの貸ボート

ボート屋の眼鏡が探す時間切れ
 ボートをばとめてビルの栓を抜き
 貸ボート岸へつないで今日もひま
 ブラウツのかがみ気になる貸しボート
 心中するボートと知らず羨やまれ
 ボート屋のガクン呼んでる時間ざり
 夕闇にアベックのボート消えて行く
 フェリーボート夢の駈橋また崩れ
 ぬれぬずるにたつてボートにしがみつ
 オールの手休めて借金思い出し
 貸しボート時間切れからひとまわり
 ただひとりボートに乗つてあほらしき
 先客のボートが来てる 柳蔭 弘村
 恋語るボートは波にまかせとき 隆史
 ボートだけ残して事故の海静か 圭木
 青春は楽しボートのはしやく声 草々
 追いついたボート絵日傘ほどでなく 九呂平
 思い出のボートへ新婚二人連れ 晃康
 一人漕ぐボートカラスにとり巻かれ 静水
 青春の合唱が続く貸ボート 市郎
 ボート浮く湖上みつめる失意の日 涼髪
 シーズンへずるボートの並ぶ岸 仲太郎
 競艇のボートを追って旗に出る 照児
 ボート桶に水着ときかえてる娘 生薑
 昔の茂みへコレボートが浮く暮色 徹也
 釣竿に又叱られてるボート 万古
 デートした最後ボートで打明ける 季費
 バラソルの指図にボート逆らわず 藤波
 優勝で主将は川にはり込まれ 句念坊
 金つちが乗ったボートは案じられ 火木

ボートでも買いたいような共稼ぎ 旭峯
 隠して行くようにボートに乗せて行き 蜻蛉
 恋のボートベンチへかけて居ることし 宗太郎
 春の海ボートものたりのたりゆく 尚史
 ボート又あまひ言葉を聞かされる 圭木
 停年がボートの番をしてくらし 雄声
 美しいボートのロケへ人だから 八九寸
 レジャーブームのボートの儲けをまた頼み 雄々
 人
 ボートからボートへ移る低姿勢 蛙木
 地
 私は唯漕いでいるだけ妻の舵 八郎
 天
 ボート屋が奥さんと呼ぶおかしき 意二郎
 軸
 オール立てて写した頃の父若し

素顔

直原七面山選

ソバカスが素顔へ魅力添えており 尚史
 どうでもよい見合素顔を見て貰い 静水
 あどけない素顔媚売る娘と見えず 一鶴
 午後三時夜の女はまだ素顔 愛鳩
 鏡台へまだまだ自信ある素顔 同
 宣伝の化粧素顔の娘を招き 代仕男
 ダンサーの素顔見て来た昼の火事 実男
 身だしなみせよと言われている素顔 卯之助
 よろめいたはずだ素顔が美しい 照児

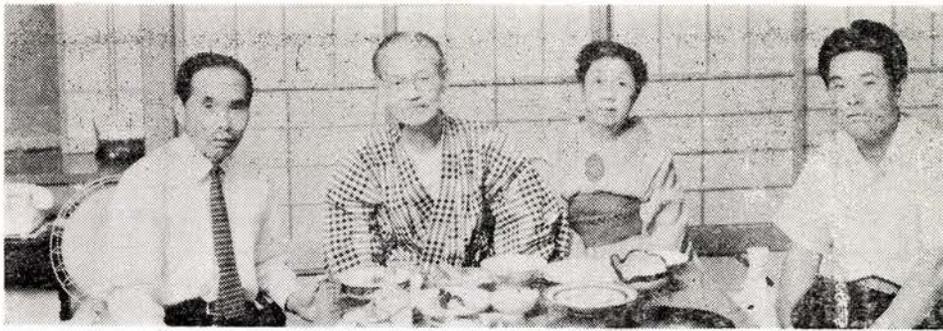
妻の座をいつか固めている素顔 生薑
 妾見に素顔やっぱり老けて見え 雪美
 夜の蝶自分の素顔忘れかけ ひろし
 美しい素顔カメラへためらわず 秀峰

素顔とは別な花嫁 出米上り 静水
 お見合にドライ素顔のまままでゆき たけお
 呼鈴にうっかり素顔見つけられ 意二郎
 フィルムの余り素顔の妻を撮り 淀月
 しみ一つ素顔を見せぬ女にし 花美
 人
 余りにも違ふ素顔に札を欠ぎ 藤波
 地
 午後二時街の素顔がゆがみ出し とん智
 天
 恋知って女素顔の美を括てる 花美
 軸
 素顔になつて女の 他人めき

色紙短冊
 書画用 口取
 大原七面山
 丹精堂
 名古屋

柳一界一展望

▼長野文庫、紙智一太師氏（今治市）は松山市道後温泉山吉別荘に滞在する際、王将大業を七月二日に訪ねられた。



旬会

▼本社九月旬会は七日（木）午後六時から上六南の関西会館（天王寺電話局東隣）三階会場で開催。当夜は忌日を繰り上げての川柳忌句会であるから、柳縁につながる柳人御誘い合わせの上多数御出席願いたい。▼南区医師会文化部杏林川柳句会（大阪市）は八月二十七日午後三時から阪急沿線苦菜園苦菜山荘で開催。▼南海電鉄句会（大阪市）は八月十七日（木）午後六時半から難波親和クラブで開催。▼ココロ川柳会（大阪市）旬会は八月十八日（土）午後五時半から黒田国光堂で開催。▼大阪通信病院旬会は八月二十六日（土）午後二時から五階会議室で開催。以上路郎主幹出席。▼川津淀川支部旬報百号記念岡山吟行は八月六日（日）日赤岡山支部で開催。▼川津岡山支部七月例会は二十二日日赤岡山支部で開催。▼川津篠山支部の第八回川柳まつり優勝橋獲得祝賀会は八月十三日（日）多紀三景の一篠見四十八滝で開催。

▼広島川柳会創立四十周年記念、広島平和祭川柳大会は八月六日山陽記念館二階ホールで開催。▼第二十六回秋田県川柳大会は九月十日（日）午前九時から南秋田郡五城目町信用金庫二階で開催。▼第五回下越川柳大会は八月六日（日）午前十時から新発田市中央公民館で開催。▼豊中川柳会夏季吟行は八月二十日午後一時から宝塚市ヘルスセンターで開催。▼第六回新潟市川柳大会は八月二十二日（火）午前十時から新潟市古町五清水フールドセンターで開催。▼新潟県物故者慰霊川柳大会は九月二十三日（土）午前十時から小千谷市照尊寺で開催、兼題、代表作・真白・涙ぐむ・見事・寺・雲、投句は五十回同封の上九月十日までに新津市新栄町山田加勢夫宛。▼第十回東北川柳大会は十月十五日（日）午前十時から仙台市東二番丁河北新報社別館ホールで開催。兼題、のらりくらり・おぼあさん・感激・苦心・夢・負け惜しみ・光り・釘・歩・十年目、投句は百回封入の上九月三十日迄に仙台市東八番丁一七〇後藤閑人宛。▼噴煙・たんぼぼ・電々・合同、吟行川柳会は九月十日（日）午前十一時から八景水谷山住で開催、兼題、野心・鳴・風、投句は三十回同封の上九月五日までに熊本郵便局私書函第四十五号、川柳噴煙吟社宛。

消息

▼東野大八氏（美濃加茂市）から、「岐阜は今日は三十六・二度、頭が消滅しそうです。木害はどうやら無事でした。▼国弘平休氏（下関市）は七月二十四日下関を発って、夫人同伴、北海道道遊の十日間の旅に出られた。▼奥村丹路氏（東京都）は去る五月発令で東京勤務になり単身上京赤坂で下宿生活をして居られる。「下宿と云っても上等でありがたいと思っております。独りですから本も読める、勉強も出来ると思っております。独り住いは、独り住いはこんな忙しいと思いませんでした」

▼大鶴喜由氏（京都市）は七月二十二日札幌、洞爺湖などを見物、「絵の中をお船が走る洞爺の湖」の句信を寄せられた。▼水松東岸氏（岡山県）は心臓肥大冠状動脈硬化症のため自宅で療養しておられるが、脈博が少く、腰から下が一日中冷蔵庫のように入れているので電気こたつを毛布の中にに入れて寝ています。▼河村瑞川氏（大阪市）六月二十日ロンドンからの寄信、「一昨日ロンドンに着きました。昨日は二つ

特約店

ス ス ク ス
ク ク ク ス
テ テ テッ ク ス
ツ ア テッ ク ス
キー ボー テッ ク ス
オ ト ナ カ ボー テッ ク ス
竜 神 コ ン ビ ー ド

株式会社 沢田商店

大阪 市東区平野町四丁目七番地
電話 2705・4003・4888・8415
分室 大阪 市北区平野町四丁目七番地
電話 8415
東京出張所 東京都台東区北三草一丁目十五番地
電話 (866) 1218・1219

不朽の人々



播州善望山にて——大鉄局の正本木客氏

引退の取り沙汰しきりな若乃花。
 気力じゅうぶん、早朝からのけいこに汗かいた巡
 業先でのひととき。
 これは、若い頃から軽重を気にしていたが、二十、三
 年にやっと五十キロを越えた私の幻想である。
 蔭の声——句に引退なし

朝露へ四股ふんでみて旅にいる

(本客)

京での労働組合の役員会議に出席される由。「温海嶽浴衣で一丈だけ登り」▼築山快夢起氏(ホノルル市)は、今夏は東西からの観光訪問客が多く歓待にクタクタになっています。一面識もないのが紹介で来られるのが一番の苦手で、歓談の種もつきるし閉口です」とのこと。▼阿部佐保蘭氏(東京都)は八月四日夫人同伴で信州大町の御息女の新居を訪問、木崎湖に遊び、莫温泉で都塵を洗われた。温泉と云っても一軒しかなく、河鹿なく緑の新鮮な静けさが気に入って予定を一日延ばされた由。「せせらぎをうつつに聞いて寝る枕」▼津田千舟氏(大阪市)は七月三十日湖岬方面へ快適な銀婚旅行をされた。「串本港ヨイシヨイシヨいで暮れてゆき」▼丸尾湖花氏(高槻市)は八月十三日から三日間、和倉温泉、関の戸、金沢、東

尋坊、片山津温泉など北陸の各地を周遊、激務の余暇を楽しまれた。「飲んでからついの浴衣で出る散歩」▼前田マチエさん(松山市)から、「路郎先生御夫妻が故伍健の墓参をして戴きましたのを新聞で知り、お目にかかれなかつたのを残念に存じます。伍健の元気な時には皆様のお噂をよく聞いていました。今は川柳のお友達もめったにお会いすることもなく、先日、高知の岡村嵐舟さんと矢野さんとお出で下さいました。」とのお便りに接した。▼小西雄々氏(米子市)は八月二十四日から一週間、ディーゼル特急の講習受講のため上京された。▼長野文庫氏(今治市)は、先日松山の宿舎へお訪ねした節、路郎先生の想像以上に元気なお姿に接して安堵すると共に私自身にも元気が出たように思いましたが、そのためかどう

か、この夏は至極元気に働いておりますと。▼高橋蟠蛇氏(須崎市)は出張中の土佐中村市から「アルミ貨の一つ不足が乗りおくれ」との句信を寄せられた。▼渡辺曉童氏(愛媛県)は七月三十一日氏発案の吉海町民演芸大会に出席、八月十一日十二日の二日間、愛媛県五市三郡の公民館研修大会を主催、閉会後文部省の室長以下六十名で納涼船大島一周を楽しまれた。▼田口麦彦氏(福岡市)は九日から夏休みなので七月二十五日から上京、八月中日大法学部で勉強されていられた。東京では七つの句会へ出席された由。▼山田季賛氏(広島県)は八月十三日十四日の二日間、肝臓炎を押し止した。▼橋本緑雨氏(大阪市)の令兄故牙羊氏(俳人)の顕彰碑が金二百円。

句集

沢市打木町に完成、除幕式が八月十六日遺族、米實、関係者ら百人が参列して行われた。句碑は高さ約二米、「汐木焚いて舟まつ磯のしぐれかな」の句が刻まれている。

▼河野春三著(無限階段)が一九六一年七月一日東京都豊島区巢鴨六ノ一二九森林書房から発行された。戦後、川柳を三要素から解放して短詩として文学的向上を図り、発行した「私」から、「人間派」を経て「天馬」に至るまでの二百三十余句が収められている。あくまでリアリストとして、小市民的な感慨で、ふりかかるときびしい現実の中に生き抜こうとする一生活者の記録にしか過ぎない私の作品である。と著者はその序で云っている。B6版九十九頁、定価

須崎豆秋 著

川柳 ふるさと 句集

— 売切れ —

明和句集

明和

価一〇〇円 送費二〇〇円

取次 川柳雑誌社

新居浜市宮西町一、一〇六
 残暑御伺 月原宵明

転居

▼西いわを氏(大阪府)は大阪府南河内郡美陵町野中一六七へ転居。▼国弘半休氏(下関市)は下関市上新地町小門へ転居。▼絹下南天氏(奈良市)は奈良市南宮終南町六六五へ転居。▼宮政局防氏(ホノルル市)は39031 Pooholua Drive Aiea Height, Aiea, Hawaiiへ転居

社の黒板

☆川雑米子支部は米子市富士見町一三五へ移転、支部長は故三嶋実笑氏の後任として小西雄々氏が推薦された。今後の活躍を期している。

昭和三十六年度川柳まつり

優勝楯を

手にして

川柳する幸福に酔う



篠山支部

酒井ひか平

悲にまでも一度はと思ふ優勝楯を、今
しっかりと二度までも抱かせて頂く事にな
った。篠山支部、一同感激の喜びに
心行くまでひたらせて頂きました。

私自身、全く、此れが「ほんとう」か
と、今でさえ嘘のような気がしてなりま
せん。

川柳をやるからには、是が非でも、一
度は抱いて見たい大楯の重量感、何物
にも変え難い幸福の味であると思いま
す。

だが、責任の大きさと重さが、それだ
けに当支部と支部を預かる私の身に寄せ
られるのだと思うと、うかつにしておら
れない大事な立場を痛切に感じないでは
居られません。

しかし、輝かしい楯を飾る床の周とて
ない貧しい私に、こうした大切な楯を授
けて下さる師の慈愛の深さには、どう表
現したらいいか判らない程の感激を致し
ました。

★ 雑稿

★ 不二田一三夫

文士として登録している作家は三百何
十人だそうだが、そのうちの百五十人は
どは、まあまあ生活だそうである。そ
の百五十人の半数の七、八十人が世の部
課長級の生活だそうで、松本清張氏のよ
うに年収三千八百万円、一日七万円の税
金なんて夢みたいなはなしもある。

川柳人でホントに原稿だけで生活して
いる人がいったい何人いるのだろうか、
おもえばお寒いことである。やはり川柳
は趣味以上にはやれないようである。だ
から作句に行きづまって自殺でもやらか
すような人はちょっと出ないのではない
か。

いろいろな雑誌を手にして、バラバラと
ページを繰ってみる。誌面が黒く見える
ページはほとんど読まないことにしてい
る。一口に云えばその黒いページは漢字
が多くて読みにくいからである。わるく
云えば文章がキツと古くさいからだ。誌
面の黒と白とでおよそ年令もわかるよう
な気さえするのだが、どうだろうか。
黒いページは理屈っぽくておよそおも
しろくないが、最近の本誌は白いページ
がウンとふえてありがたいと思ってい
る。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|--------|------|------|-------|------|------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|-------|-------|------|------|-------|------|------|
| 武部若菜 | 早川清生 | 小倉へとち | 石居高志 | 池田古心 | 新岡回天 | 笹野旭子 | 丸野初甫 | 津秋六花 | 松下一楼 | 深見雅堂 | 長尾越鳥 | 酒井ひか平 | 不二田一三夫 | 志水礼司 | 坂田東洋 | 伊達堰子 | 木村十悟 | 川端鬼醉 | 清水望峰 | 神谷凡九郎 | 永藤弥平 | 野田素身郎 | 永松東岸 | 藤井明朗 | 高橋操子 | 高崎雄声 | 橋本幸童 | 浜野奇童 | 津田万古 | 松村万古 | 竹内圭三 | 小池しげお | 森本法泉子 | 村上ゆづる | 馬場夢生 | 松川杜朗 | 本田恵二朗 | 下山清潮 | 稻葉場花 |
| 光好陽子 | 江国幽谷 | 大谷月都 | 原多柳志 | 本家代仕 | 久家代仕 | 林どんた | 山本立兎 | 野田一介 | 田中蛙子 | 梅木宗一 | 西川吾柳 | 石坂新雪 | 榎本露児 | 宮口笛生 | 山田伊三 | 多田九平 | 中村九平 | 橋高薰子 | 平尾青一郎 | 池上知恵美 | 前川左文字 | 菱田満秋 | 小浜牧人 | 野々口美舟 | 見島与呂志 | 安部立美 | 杉本辰一 | 中松恒雄 | 松岡滄浪 | 辻岡圭木 | 西田柳太 | 阿部柳平 | 酒井清子 | 西田清一 | 徳水鬼美 | | | | |
| 藤村梨花 | 伊原明舟 | 門永三吉 | 工藤紫光 | 高津徹也 | 谷沢祐祐 | 藤村鳥雀 | 小島さぎ | 河井清佑 | 宗高矢寸 | 植村客遊 | 加藤繁雄 | 森下愛論 | 平沢保美 | 野村岬月 | 村山光輪 | 中谷ハナ子 | 木山暉二 | 傍島静馬 | 米虫一乃 | 北村芳三 | 岡嶋芳道 | 森田若人 | 福田多司 | 大前鳴悠 | 村上昌童 | 林上狂二 | 田中狂二 | 魚住満潮 | 石倉旅風 | 竹内千里 | 吉原紅月 | 辻原白溪 | 高野むじな | 樋口舟遊 | 野呂鶴汀 | 河相すむ | 徳水鬼美 | | |
| 辻川喜仙 | 高橋尚史 | 井阪東天 | 平田実男 | 渡辺曉童 | 安平次弘 | 高山涼髪 | 関戸宗太郎 | 横山一 | 内海敬太 | 川竹松風 | 室井八九 | 今西生童 | 建沼康之 | 杉前南宗 | 山本善風 | 吉本善風 | 林本夢 | 鳥本千尋 | 室田千尋 | 舟木与根 | 小林孤呂 | 梶谷冬生 | | | | | | | | | | | | | | | | | |

柳魂練磨 (一)

— 川柳塔へ苦言の弁 —



直原七面山

川柳の発展と作品の向上を願って川柳塔にメスを入れる。
(川柳を多くの人々に普及させるために、川柳を芸術作品として鑑賞するために、また、より良き作品を世に送り出すために。)

佳吟名句は路郎先生が、新川柳鑑賞とか、名句と難句などに取上げられ、一応はなばなく脚光を浴びているので、私は専ら、傷もの句をとらえてきて、これらにできるだけの手当をし、適切な指示を与えて、できればそれらの句が、佳句としての息吹きをとりも

どすように、愛情にみちみちた助言をしたかと思っている。
しかし、浅学非才、研究不足の点もあって、諸家の意にそわないところもあるでありましょうが、そこはそれ、もっと偉大な名医にご登場願って、足らざるを補っていただくこととし、私は私なりに、握りなれたメスを執ることにいたしますしう。

三十二年六月号の川柳塔より
求道者であるか知らんが酒が好き
逆うなありや農薬のよな男
婦唱夫随ただ花見て歩くばかりなり
あるか知らんとか、よな男とか、花見て歩くといったような、窮屈できこちない、しかも未熟で燃焼不足のコトバを、句主達はなぜ数あるコトバの中から選び出してきて、わざわざここに使ったのであろうか。
どう考えてみても、その真意がつかめませんし、あえてそうしなければならぬ理由も見付け出すことができません。
また、そうしたことによって、なにひとつ利するところは無いように思われるのですが、これらの句は当然、
求道者か知らんが、あの人酒が好

き
求道者か知らんが、とっても酒が好き
逆うなありや農薬のよな男
婦唱夫随ただ花を見て歩くばかりなり
と素直に詠みくだして、句にのびのびとしたおおらかさを与えてやるのが、本然の姿ではありませんまいか。
これは句主達のこれらの句に對決しての研究が足りなかったか、それともまた、力量不足か、いずれかに原因があって、こうした異様な句が生れ出て来たのでしよう。
×
笑うても泣いても女は損をせず
生き甲斐を、会長二つ三つ兼ね
奥さまが注文ですと冷ぞう車
女はのはは削りとしてしまつて、中八を中七にして、句を五七五の正調にもどし、中七の句語の流れをなめらかにするとともに、女をグッと引き立てて強めた方が、この句の場合が良い。
あえて破調にしなければならぬほどの理由は無いようです。はいこの句全体に對してかえって散

漫性をささえています。
つぎに、生き甲斐をのを、当然、へにとつて代るのが川柳の定石でしょう。
また、奥さまがのは、まがのは、にして語音を弱め、つぎにくるアクセントの高い注文の注にマッチさせて、上五から中七への流れをスムーズにしてやるのが、句作者としての常識ではないでしょうか。
したがって原句は、
笑うても泣いても女損をせず
生き甲斐、会長二つ三つ兼ね
奥さまの注文ですと冷ぞう車
となります。
そこでこれらの句を原句とそれぞれ読み比べてみていただければ、なる程そうした方が良いのだなということが、はっきりお判りのことと思えます。
×
容姿端麗女房を二三寸凌ぎ
切符さえ楽に買えぬに又値上げ
上げ
春雄
日満
出直していただくなくてはなりません。
句のおそまつさが目立ちすぎます。句主の再考を願うとともに、出直していただくなくてはなりません。
すまい。
(つづく)

梅志

残暑御見舞

麻生路郎

この三句は三句ともいづれ劣らず余りにも独りよがり句です。句の主人公はどこへやら姿を消してしまつていて、句は完全にから廻りしています。

一体どこのだれが容姿端麗で妻を二三寸のいでているのか。
なんの切符が楽に買えなくて値上げされたのか、なにをけい古していてテープにとられて楽でないのか、句主自身にだけ判つていて他人には判らないクイズ的な句で、なにがなにやらさっぱり訳が分りません。
句のおそまつさが目立ちすぎます。句主の再考を願うとともに、出直していただくなくてはなりません。
すまい。

ことしの暑さは特別にさびしいようです。だが御状がそこまでできています。さあ切符を手に入れますしう。

金 泥 集

課 題「針」

麻 生 葭 乃 選

お祖母ちゃんひつつき虫が糸通し 阿茶
 針供養ごんにやく迷惑だと思ひ 同
 養子ですもんとボタンへ針をもち 同
 昆虫へ針ピンいやな夏休み清子
 仮縫いの針でヒップをつかれたり 同
 立て膝で男仕立ての針さばき 同
 うたがいも知らず晴着の針をうつ 若菜
 妻という砂針の生きるせわしさ 同
 針の穴頼めばねだるお小使徳子
 子はセンチ母は鯨の針仕事 同
 生活とたたかう針の忙しさきさ子
 待針の七色うれし恋を得て 同
 針山に泣嫁しなく先の姓をつけみち子
 針のよな神経の娘に弱り果て 同
 針一本夫なき後を支えて米岡甫
 見付からぬ針に立ったり座ったり 同
 ノイローゼ注射の針にたよりきり友子
 どなられてやっとな縫針置いて立ち 同
 待針を抜いて末の子抱いてやりカネ女
 働くよろこびを針は知ってくれ 同
 たしなみはハンドバッグに針セット 奈良子
 お稽古の針は山道迎るよう 同
 針みみず通らなくなり世をゆする 好女
 小町針又針山の中へ消え葭乃

次回題「半額」切九月末日

調 いて 平 つい か に ひ



酒 井 ひ か 平

私の雅号を口の悪い人は、びか
 べーと申します。事もあらうにひ
 か平とは余りにも、けつたいな名
 やなあと云う人もあります。そし
 て、ふざけた雅号だとなる人も
 あります。だが私を見た人は、此
 れ程、あなたに、びつたりとした
 雅号はおまへんでと感心されま
 す。

私の名前は、いつ付いた、のか
 私には判りませんが、以前ひかる、
 本名は利光なんです、あまりよ
 くないので、光だけを取って居ま
 したが、無鬼先生の光に添う影の

ように篠山句会で仕事をさせて貰
 った、影、即ち何時も、ひかえて
 居る処からひか平となったもの
 か、光に平が付いたのか、その処

がはっきりしません。と云うと無
 責任極まる話ですが、一方私の句
 が、そうした意味でPRされるの
 なら、それで行くかと思つて押し
 通して来ました。

大阪島内の丁稚生活を振り出
 しに、色々の貧相な職業を渡り歩
 るいた私、海軍生活もやれば画家
 を志し、大阪駅前の闇商人から銭
 湯の三助もやれば、立杭焼復興を
 てい唱する小使さんをやれば、そ
 の儘社員になる、十二貫そこそこ
 の身体でボクシングをやると云つ
 た、むじゅんだらけの生活をやつ
 て居りますが、私に一貫して付い
 て来る貧乏だけは未だに逃がれる事
 は出来て居ません。

だが、私は、明日を信じて居ま
 す。それがどんな姿でこようと
 も、私は私なりに善意に解し、そ
 の希望を描い乍らも句にして居ま
 す。酒は好きでも十二貫位ではた
 くさん呑めません。女性には一目
 惚れしますが、向うが一度だつて
 ウイソクを呉れたためしがありま
 せん。かくし芸は一切出来ませ
 ん、音痴もテイチイして居ます。
 勿論金とは女性以上に縁がありま
 せん。

しかし、くよくよしては居ませ
 ん、こうした中にも、笑いもあ
 り、涙もあります。それを一つ一
 つしっかりと自分で噛みしめ、一
 句一句作句して行くうちに、独り

私の体臭のように「ひか平」調と
 云つた個性が出て来るのではない
 でしょうか。

十二貫柳に風とくらして米
 頑として牛はゆっくり用を
 足し
 細長こうやってまんねと未
 だかつぎ
 ボーナスの元気で他人につ
 き当たり
 今あつたスリッパが無い二
 流館

スマートで
着心地良い



GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

OKと気軽最後に聞いて居
ず

路郎師の慈愛の手でこうした貧
しい句が育てられて来ました。

いのちある句を創れ



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
▼縮切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 八月の会 (大阪市)

8月8日 午後6時
会場 関西会館

暑さが頭へ来て不快指数が八〇越した
せいでもなからうが、八月一日から三日
間、釜ヶ崎に大暴動がほつ発した。その
不快指数の余波か、本社の集まりがわる
い。どこさんも同じようであるが、こん
な時にこそ、ウンとこ出席願えとあり
がたいのだが、ともすると句会軽視に句
会部は泣くにも泣けない。

中島生々庵副主幹が、帰日第一声「欧
州みやげ」をさげて、八月句会の柳話を
された。約一時間にわたって愉快な話が
つぎつぎ飛び出し、特に裸の大將、山下
清画伯と同道されただけに話題は豊富で
ある。この「欧州みやげ」は12ページを
ご覽ねがうとして、氏の無事帰日を祝福
申し上げる。

八月の不朽洞賞杯は、不二田一三夫氏
の本年度三回目の獲得となり、名手正木
水客氏とのシューゲームが、こんこの
興味につながれそうである。(F)

出席者 1 路郎・太京・文蝶・圭井堂・

八郎・白柳・摩天郎・一三夫・阿茶・六
童子・柳宏子・正一・水洞・薫風子・静
馬・す・む・生屋・紫香・清人・庸佑・
葉平・大丘子・生々庵・十悟・高史・水
客・晃・文秋・栗・いさむ・いわを・狂
二・舟遊・柳太・計光・昭司・南宗・愛
論・路兒・梅里・宏子・霞乃

兼題「雲」 麻生路郎選

ロケットに雲もフワフワとおれず 梅里
旅に出て雲見る心とり戻し 水客
天才の雲は流れてゆく如し 栗
雲一つないを予報は淋しがり 文蝶
遠泳の雲まで泳ぐ意気を見せ 薫風子
雲出し暴徒の顔にある 殺気 晃
ラッパ飲みの彼方に湧いた雲の峯 栗
浮き雲のような夫で気が 疲れ 十悟
夕立の雲とかけっこして 帰宅 大然
雲いきに亭主浮気を見合わせる 狂二
気まぐれの雲かみなりも置いて逃 文秋
さのこ雲神を忘れた形で 立ち 一三夫

兼題「通訳」 西 いわを選

ゼスチャーも巧み通訳語り出し 南宗
通訳の鼻の高さが異国めき 栗
其の辺で区切つて通訳言えも 瑞歩
歌碑の歌通訳も一度つばを飲み 生薑
通訳の笑顔に握手くり返えし 水客
ユーモアのない通訳で肩が緩り 阿茶
通訳をするにも読めぬ床の軸 静馬
通訳はいらば表情でことが足り 大丘子
通訳の方がゼスチャーゆきとき 生々庵
その中で通訳だけがみすばらし 一三夫
通訳に小指を見せてうなずかせ 圭井堂

通訳はどのゼスチャーも見逃がさず
何かおかしき通訳が笑は外人も笑ひ
通訳はわからんとこだけとぼしとき
通訳はノーとイエスをよくつかひ
通訳の身振りなかなか負けてい
通訳のネットワークは良い好み
通訳が待てず片言でしゃべり 栗
意気投合して通訳が邪魔になり 柳太
通訳はも一つ人柄を買われ いわを

兼題「みやげ」 松江梅里選

いつにない土産と妻の邪推買う 大然
大阪で出来たみやげを買って来る 柳太
みやげからもう世帯しむハネムーン 清人
黙殺をされる土産と気が付かず 水客
言訳のみやげがら終電車 清人
分けように困るみやげが一ツさり 南宗
アリバイのみやげへ妻の冷たい眼 多久志
達者な顔が何より土産故郷の母 栗平
子のいない物足りなさの土産提げ 水洞
旅なせいでみやげにまだ迷い 正一
みやげもの両手に新婚帰つて来 一三夫
土産の米を 押んだ 昔 狂二
豚まん土産へ座る 子 沢山 三司
小遣いも呉れず土産も買つてこ 南宗
みやげ頼むぜと緊張をはくしとき 水客
土産の勧めすげのう断れず 文秋
みやげ物USAのおすそ分け 一三天
御みやげの分まで脱線してしまひ 十悟
ダンヒルは煙草の好きな父に買ひ す・む
悠々と手ぶらで帰る午前二時 愛論
みやげ物大阪弁がねぎつとり 庸佑
ようかん一掉であんじょう丸められ 愛論
土産は取って集金断わられ 狂二

兼題「洋食」 土井文蝶選

げす板のみやげあと味悪い旅 梅里
洋食のマナーに母は気がつかれ 一三天
たべつけぬ洋食が出て胃がもたれ 南宗
洋式の披露宴アツチ見コッチ見 水客
テキにカツ明日に備える合宿所 清人
洋食と洒落て大工がひるのパン 白柳
カレーより知らぬ子どもとニューミル 柳太
ピクニックがキャベツの嵩へ軽く乗り 文蝶
家中洋食ゾースが空になり 栗平
刺箸を買い洋食に親しめず 愛論
洋食がすきやおばん衰えず 十悟
ちやらんらんこしらえて妻洋食と言ひ 十悟
洋食につく手洗を飲んじまい 愛論
自家用で来てとんかつの甘い店 三司
歯に自信なくてコロケ注文し 文秋
洋食を左ぎつちよの箸で食べ 梅里
肉のきれやと出て来たライスカレー 阿茶
陳列のビフテキ本物と違い過ぎ 庸佑
歯こたえのないビフテキで物足らず 静馬
横文字が読めずニュー指を指し 狂二
洋食のメニューに触れ 繁太郎
陳列でつい洋食の方に決め 拳児
レストラン妻の任草に惹着けず 高史
洋食に刺箸をえて祖母の席 生々庵
エビフライとれと気ままな昼に 水客
洋食と言えは目のない子を連れて 文蝶

席題「童心」 金井文秋選

童心にかえる夜店のカーバイト 愛論
童謡に妻の童心見つけたり 高史
童心になって阿呆の御つき合い 十悟
同窓会博士もあだ名で呼び回り 狂二

童心は注射をしない医者が好き 阿茶
 童心を大人の知恵がふみにじり 兎
 童心は車掌にほんとの年を言い 静馬
 孫来れば孫とふざけて小半日 圭井堂
 童心に呼び戻されてハトポッポ 梅里
 童心へただごとでない母の紅 六竜子
 童心にかえれと漫画におしこまれ 舟遊
 或る日ババ勤く玩具でよく遊び 紫香
 ほんとうを言つて童心叱られる 静馬
 先生のデモへ童心とまどいし すゝむ
 童心の後悔涙ためている 舟遊
 おみこしの汗童心の声ばかり 水客
 週末は欲を忘れて子と遊び 水洞
 童心になれば重役らしい 顔文蝶
 童心に返り真夏の陽と跳ねる 柳宏子
 退院の朝童心のありつたけ 水客
 本当のすがたをうつつ子供の際 兎

席題「冷房」 森下愛論選

クーラーの音にもいらいら倦怠期 愛論
 席題「サングル」 木村水洞選
 サングルがほら息子にまじり合い 正一
 文闘へ子のサングルが石左 庸佑
 サングルが似ててアリバ、あやしめ 正一
 サングルに替えて散歩もそこらまで 文秋
 サングルが妙に重たい月曜日 計光
 サングルで出勤れば社長に呼び出され 圭井堂
 心斎橋サングルのままねり歩き 計光
 サングルに歌麿描く足がなく 一三天
 サングルばかり並んでる町内会 兎
 サングルで来てはデパートよくつかれ 紫香
 サングルのままが自慢の自家用車 生々庵
 だらしない音でサングル引きずられ 柳宏子
 サングルの季節になつて足のつめ 清人
 サングルで心がらして海帰り 庸佑
 浜寺の砂をサングル乗せて去に 文蝶
 サングルでビロビロよける水溜り いさむ
 サングルの末路哀れな大掃除 圭井堂
 友送るサングルゆつくり音をたて すゝむ
 職安の列へサングルちびている 一三天
 サングルの一歩一歩に恋を秘め 清人

「川柳まつり」

兼題「作家」 西尾 栗選

作家だと言わんばかりが縄のれん 清潮
 投書夫人作家の夢も少し 待ち 兎
 作家の自由フライバシーを侵し 香林
 捨てられて女流作家の筆がびえ 紅月
 マスコミの世なればこの作家なり 小石
 売れっ子の作家行方がまた知れず 東岸

原稿を追うて編集 飛弾の奥 圭井堂
 作家一日金にならないのも書き 潮花
 美男美女書いてる作家の無精髭 狂二
 作家ともいわれ漁色家ともいわれ 七面山
 ペンネーム読みにくいのが儲け 一乃字
 品変えて同じテーマを売る作家 すゝむ
 名作家といわれて胃が悪いなり 毒風
 作家風吹かせ三流パーで持て 花美
 処女作が当たっただけで消え行き 一三天
 オートメの様に流行作家書き どんたく
 酒場の灯作家スランプ捨てるに 草々
 團秀作家マフラーと肥えてくる 嶮多路
 家庭では案外封建的である作家 敬太
 名の売れた作家テレビで顔も売れ 峰子
 館直志徹夜の眼鏡すつて 水客
 御用聞だけが先生と呼ぶ作家 正一
 釜ヶ崎恨しろに作家ベンを探り 多久志
 すれ違いにさせて作家は一服し 宏子
 作家より殊で儲けたことで売れ 可住
 ヒロインを殺して作家風呂に入り 兎男
 法善寺作家の飯の種になり 与呂志
 小説を書く女房へ気が破れ 木洞
 クラブ振る作家とならぬこの人も 薫風子
 作家もう時代のすれへ目ををつちり きさ子
 作家今日読みたくもない週刊誌 梅志

兼題「聖書」 川村好郎選

若き世代聖書に背くことばかり 兎男
 平穏な生活へ聖書忘れられ 宗太郎
 忠告へ聖書の言葉お借りする 十悟
 聖書読む女に語れぬ過去があり 井蛙
 聖書の子創価の父へ争わず 八九寸
 平熱になればバイブルはつとかれ 多久志
 一生を聖書に生きて婦長なり 源 髪

恢復期書見器の聖書開けたまま 天悟空
 無料くれるものに小型のマイ伝 みのろ
 バイブルへそつとはきんで渡す文 旭峯
 パパママのかかりじつと抱く聖書 香林
 修道女アクセサリーめく聖書 失名
 なぐられて聖書返りにしてられず 清子
 妻ふたりめとつたどあり聖書にも みき子
 バイブルを持つた日もあり換たこの 圭井堂
 チャタレーの隣りに聖書雑居する 三司
 聖書開きながら明日のデート考える 梅里
 聖書とは別に神父の人間味 水洞
 長男の部屋は聖書と白百合と きさ子
 感激のラインが引いてある聖書 阿茶
 氣にしたか空果も聖書置いてゆき 白柳
 愛人が聖書の中の 人に見え 東岸
 聖書なら僕も持つてる書架の隅 尚史
 聖書ばかり読んでまだ嫁きません 愛鳩
 借りて読む聖書教会あたか 梅志
 恨むまい憎むまいぞと聖書読み 辰始
 バイブルを忘れヒールの酔い心地 水洞
 いつ見ても独房聖書読みふけり 水客
 フリージャの恋は初心なりき 乗
 聖書読む乙女の部屋のフロアイド すゝむ
 聖書持つ神父も家では只の父 清潮
 バイブルを読んで夫を尻に敷き 水洞
 療養所出てから聖書にある埃り 弘道
 聖書いつ読んでるか今日も待ち 湖山
 失恋へ聖書を買ってなくさめる 一三天
 失明の両手に聖書のせられる 水客
 バイブルは知らんが踊りクリスマス 一平
 一頁だけ読んだ聖書が出た掃除 無
 刑終えてからは聖書を手離さず 蛙眼子
 途中まで読んで止める聖書 すゝむ
 どん底に生きて聖書を手離さず 美恵子

兼題「天引き」 吉田圭井堂選

天引きで株に力を入れて 恒明
 天引きで若き血潮が封じられ 計光
 天引きの貯金夫婦の気が揃い 春巢
 天引きを昏んなおと嫁に行き 荷風
 天引きのお陰気怪な旅に出る 武助
 天引きの利息へどんと利子がつき 満秋
 いか引かれずに済む月もあれ 愛二
 穴埋めへ天引きされる費い込み 兼孝
 ビンはねの如天引きの所得税 晴暉
 天引きで鈍子一本けずられる 大然
 無いものと思ひ天引き旅に出る 舟遊
 ちやかりと利子天引して貸してくれ 庸佑
 妻の手にのるまで天引されておれ 瑞歩
 天引きの学費予備校のうちに消え 嶋多路
 天引きで会社の株を買わされる 紅月
 いつ迄も続く月賦天引きの青春よ 水客
 天引きで妻のブランドのささやかな 与呂志
 娘には娘の当り天引き貯金帳 六竜子
 天引きで袋が軽い月給日 すゝむ
 天引きの貯金へ足した親心 紡毛
 天引きが家計を赤にしてしまい 紫香
 天引きを浮かす煙草がやめられず 暇子
 天引きの不審へ妻が食い下り 弘道
 天引きをし過ぎ豆腐の日が続き 夢虹
 無理をした天引き貯金が療養費 八郎
 天引きとへそくり夫婦なじり合ひ 光郎
 天引きの利息の方が多いなり 静馬
 天引きでふやして株で背いかれ 東岸
 天引きで貯めればこちら穴があき 文秋
 天引きという前借りの恨めしさ 翠光
 独身税いいも悪いもなく引かれ 静水
 天引きの夢が大きい共稼ぎ 愛鳩

天引きの月賦に残業引きさうける 紫香
 天引きにベースアップも追つかず 紅月
 天引きで桜紅葉と飲み歩き きさ子
 天引きの通帳指折り確める 榮
 天引きはかないまんとんの愚痴 雄水
 天引きへ高利の金があざわらい 晃
 天引きの税も汚職に嚇られる 一瓢
 プラスアルファだけは天引して渡し どんたく
 弁償を天引きされる運転手 晃男
 天引きが忘れた頃に突り出し 繁雄
 天引きで蓄めて希望を子につなぎ 井蛙
 おごられたつもり天引きされてあり 光道
 リベートを天引きして済まして 十悟
 天引きもよろしやよろしやと言う儲け 旅風
 小銭ある袋天引きされたらし 一十
 天引きで世界めぐりの夢持たせ 句念坊
 天引き貯金おかげで危機を切り抜ける 雄声
 天引きの税ボーナスを悲しませ 雅堂
 天引きでこそ重税に耐えて来た 弘村
 天引きの貯金へ理想を持つ若さ 水洞
 天引きの利子へ感謝が薄くなり 柳宏子
 天引きの額へ手取りが気兼ねする 没食子
 料理屋のつけ天引きへ持ち込まれ 明朗
 飲み代を天引きされると知らず 小石
 天引きの貯金子の夢親の夢 三司
 天引きを妻へそくりと見做れず 七面山
 柄にない小声天引き待ってくれ 正一
 天引きの月賦に女房あわてたり 白柳
 天引きで妻に生保をかけられる 可住
 冷やかに利子天引きで渡される 多久志
 使ったこと忘れ天引き恨まれる 一三夫
 つかい込み天引きまでも押さる 摩太郎
 天引きを承知しながら腹を立て 湖花
 はなばなしくちやスト賃天引かれ ひか平

ライバルのお祝いまでも天引かれ 柳志
 末席も同じ割勘差し引かれ 狂二
 天引きも同じ出口にいる女将 海志
 給料から天引きされて気が変り 白柳

席題「鶴」 小西無鬼選

清貧に甘んじ鶴のごとく瘦せ 静馬
 愚索する鶴は片足あげたまま 潮花
 のつそりとしてても鶴にすぎななし 海志
 ふり返る鶴の容姿の貴族めき 栗
 折鶴を飾り斗病まだ続き 雄水
 親善の旅の靴に千羽鶴 露見
 瘦身は鶴の寿を聞きあきる 弘村
 千年も生きるのいやと鶴思ひ 多久志
 水際に鶴涼しげな立姿 小石
 鶴魚のおまん寿の字を背負い 十悟
 折鶴のゆれて病む子の眼がきれい 草々
 これ千羽あるのんかいと鶴をよみ 尚史
 爆音へ脚組みかえただけの鶴 夢虹
 斗病の長さ知ってる千羽鶴 与呂志
 鶴のように瘦せて売れない小説家 晃
 堺大安寺にて
 鶴曲く画師の苦辛を偲ぶ寺 摩太郎
 ひな鶴へ歩いて見なと振り返り 暇子
 親の目は丹頂鶴の日教組 圭井堂
 手紙では鶴首行ったらお留守です 弘村
 千羽鶴見守る中で息を引き 柳宏子
 菓籠りの鶴へ望遠レンズ向け 阿茶
 披露宴鶴亀一さし所望され 庸佑
 菜包紙でつるを折ってる不倅せ 愛論
 鶴の一声矢張り恐い父の声 柳宏子
 粉菜の紙で鶴折る日を重ね 湖花
 石輪も鶴の型で箱に入り 越山
 肥満型鶴の均整美をみつむ 旅風

全出席者 (八十一題)

路郎・愛論・圭井堂・文秋・一三夫
 ・すゝむ・藍児・柳宏子・阿茶・静
 馬・舟遊・庸佑・水京・蕨風子・宏
 子・霞乃

天位受賞者

①一三夫②水客③圭井堂④恒明・南
 宗⑤生々庵・正一・雅堂・葉光・静
 馬⑥鶴汀・進之助・梨花・柳志・黙
 平・柳宏子・舟遊・万的・牧人・潮
 花・紫香・多久志・古方・藍児・梅
 志・白柳・夢虹・暇子・阿茶・水洞
 ・真砂・すゝむ・狂二・晃・清人

不朽洞賞杯受賞者

③一三夫②水客①鶴汀・南宗・正一
 子の折った鶴が病床明るくし 季賢
 きびしさを秘めて優雅に鶴の舞う すゝむ
 写真機へ鶴は気取ったポーズする 露見
 戦後派も鶴の一声待つ様子 正一
 湯上りの浴衣へ祖父の鶴に似る 和三郎
 ニッポンの冬へソ連の鶴が降り 柳志
 病床を鶴鶴鶴で慰める 季賢
 シベリヤが恋しい藍の鶴となり 舟遊
 菓籠った鶴へ人間さわざ出し 一三夫
 千羽鶴石と左に利用され 永衛
 空腹な鶴スタイルは崩せない ひか平
 動物園鶴の一声待つ日長 静馬
 鶴ここであくびをしたいと思ひ ひか平
 片足で鶴は只今思案中 阿茶

別荘の鶴は世相に疎く生き文蝶
 ジャッターは他人に頼る文蝶
 瑞米は竹の園生に鶴が下り一三夫
 全盛の名残りは庭に鶴がいて水客
 つるのおりと声聞いて離れる氣柳志
 丹頂の夫婦しあわせそうに居り草々
 養子の身鶴の一声だまり込み句念坊
 銀紙のこれは彼氏の折った鶴舟遊
 鶴折て女ばかりの物足りず尚史
 泉水の鶴片足が錆びている白柳

席題「口止め」 酒井ひか平選

父ちゃんといいなや百円ぼんと出し越山
 言いう言いと口止め胃にもたれ一三夫
 口止めをされておぼはんよむており静馬
 口止めに氣付き言葉がひつつかかり南宗
 口止め料もろたことだけ黙つたり静馬
 口止めに一杯飲ましたまで喋り庸馬
 それからは口止めた目が笑う草々
 此処だけの話で切れた市場籠柳志
 目が物を言わなかつたかつねける旅風
 ぞろぞろいなど口止め押まれるすむ
 口止めの長距離電話夜中に来阿茶
 信用のなさへ口止め念をおし満秋
 口止めが先き走りする裏長屋東天紅
 口止めへ女のあわい恋ごころ三司
 口止めへ余計に口がもすもすし一栄
 十円の口止料で姉の恋雅堂
 口止をした腹心に裏切られ倭舟
 口止めにひとり忘れたのを氣付き恒明
 口止めはしたけど本心いうてはし舟遊
 秘密見た女を橋端にしまし夢虹
 ひそひそ話シーシーという隅の声梅志
 口止めをしておいたのこくやしがり庸佑

口止めの固さ小出しで高うつき圭井堂
 口止めをしても夜半に又心配愛二
 手ばなしにノックて固く口止めし蛙水
 口止めをされて大事な事と知り東天紅
 何で言うたのかねん子供は無邪氣一栄

席題「へそ」 清水白柳選

へそ出して王手王手と追いまわし一三夫
 パパ酔えば布袋のよなへそを出し淡舟
 腹出来て臍も恰幅ついて来る阿茶
 父ちゃんと違う臍を不思議がり三司
 昼風呂の余裕お臍をつくづく見蛙水
 風呂の湯を臍に残して笑わせる十悟
 学校のプールへおへそまでつかり草々
 雷の予報おへそがしくしくし阿茶
 男の子臍まで濡らした戻って来薫風子
 そのように泣いたら臍が出るがな雄水
 レディ来て話は臍の線ととめ弘村
 へその緒にほんとの日時書きこまれ圭井堂
 うたたねのおへそへハエがつきまとい草々
 へそ出して寝る真昼の青すだれ紫香
 母愛の子兒も妹も臍を出し藤児
 夕涼み臍も胸毛も意識してきさ子
 不自然な山下清の出すおへそ武助
 先生のお臍河童を見張って居ひか平
 浜寺の砂をお臍が滑ち帰り越山
 ろ臍ばかりはきして釣舟沖へ出す瑞歩
 ゴムまりの臍注射器でよみがえり操子
 こそばゆし波がお臍をもてあそびひか平
 友橋のゆたかに笑う臍の位置水客
 神棚へ臍禱らぬ布袋様和三郎
 へそに聞けばへそもたまつ聞けと言う真砂
 女けんめいに生きんとし臍出して水客
 藤棚の下は詩人のへそも見せ柳志

臍の下食婆な血がたまり旅風
 (庸佑清記)

川維 淀川支部句会 (大阪市)

木村水洞選
 均一の中から掘り出す好きな柄句念坊
 月謝均一それに甲乙丙をつけ生薑
 均一化された困地の子が遊び三十郎
 均一で見付けた妻の別の面東洋男
 心では家出した娘の便り待ち水洞
 血の通う便りへベッドはげまされ一鶴
 足あとを語る碑文が昔にむせ六童子
 小包に足あとがある御中元花村
 足跡をついでくれるは他人の子若菜

後藤梅志選
 共稼ぎ別れ話のストラと竜昭
 別れ話まで来て夫婦口が聞け保美
 深海へ驚の如くに緩ねむる冬樹
 饒老いてもつばらくらげなぞとし唯義
 折腕いつまで続く姿なる満潮
 石塔の数むき出しの死が明い水客
 おんを去なし西陽の中に坐しいなり葉平
 ハカチ一枚すつ何か書く生き甲斐梅志
 美しい喉血の筋が透いて見え晃
 七月の森にはセミの合唱隊慎太郎
 釣竿を持つ手に七月の陽の重さ良
 僕と君ハンデキヤツプは未だ牧人
 あの頃のアルバム君と僕で埋め利幸
 榮転の君から遠い僕になり漣

食品と科学

食品と原材料・機械・包装の総合誌

9月号発売中 150円(〒18円)

特集

凍結乾燥食品の現状と将来性
 凍結乾燥の機械装置
 凍結乾燥の海外情勢

講座

④ ① ① ① ①
 食品工場の衛生利用
 界面活性剤の官能検査
 食品包装

◇ 海外ニュース

◇ 特許ニュース

◇ 意匠ニュース

◇ 商標ニュース

(展望台) 主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

大阪 市 区 北 5-4
 製 版 9373-4
 大 阪 9373-4

食品と科学社

振 替 番 大 阪 6702 番

クレオンで真つ正直な顔描かれ
商品の顔でミルクで洗います
童顔の父は落日に耐えている
顔鼻れに一人盡つたのが混り
たかが顔人聞だけが大事なり

(2)

油虫別府をさして行く船に満潮
あぶ虫一匹を壁にたたきながら
ピンボケになって別嬪かっこなし
ブラウン管とおし別嬪わらいかけ
ママよりは別嬪ですと抱き上げる

芋づるを食べてた頃の胃がほしい
白飯の味あの頃を忘れそう
あの頃は虫の子がお腹に居りました
青葉についたけ虫おもいきりかぶける

湯の宿はネオンに青葉濃く沈み
天井に青葉が映える部屋で病み
老いらくの恋に青葉の照り眩し
予備校の先生に一番師恩を感じ

師を囲む寡鈍才の顔ばかり
迷い子の大きい方が泣いている
眼地もう包ませ柄にまだ迷い
宰相の顔に迷いはなきごとし

詣っても迷い読んでもまだ迷い
迷いが起きたらしい西勝造の死
迷い続けて八卦もムダにする

旅風
舟遊
童昭
生薑

川 雑 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

裕ちゃんの写真に赤い頬のキッス
写真機は罪な証処を残したり
大鼓だけ鳴り宵宮は更けて行き

つきあいの提灯だけは出す宵宮
ハンサムの入社B.Gの服変り

正一
白柳

つきたてのはやはやの特急で
はやはやのうちに案定敷かれり
門口を別々に出るもいらたて
独身時代まださめき家計持ち
図星だったか顔色が変わり
うろたえる若さに図星だと思
金ならばなによと図星つかれり
愛人は母が図星の男なり
落付かぬ素振りへ図星止めてお

川 雑 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

打水をしたりされたりお隣りと
打水の半盛籠からこぼれ
夏枯れの店へ打水ばかりする
多数決しよう事なしの下戸一人
多数決にしようかとする目が笑い
留任は助けなしの多数決
履歴書を見直すのに購をまげ
結局は妥協するのに購をまげ
購まがり頭の上さが玉にきざ
気が向いて来るまで待たず購まがり
来て見れば別れた筈の女と居
しほるだけしほって女別れる気
人の子となる乳房たぶらふませる
別れても風の便りを聞きたがり
別れたいが慰謝料で折り合わず
度の過ぎた信心気遣いにされ
綿ろうとする信仰にも金が要り
ドヤ街におち神仏を尚信じ
切っぱ詰つてからの信心眼が据わり
出発へありがた迷惑はどもくる
出発の背中朝日が押ししてくれ

文蝶
葉光
兎
柳宏子
梅里
正一
庸佑
生薑
文秋
万里
奈良子
好郎

文蝶
葉光
兎
柳宏子
梅里
正一
庸佑
生薑
文秋
万里
奈良子
好郎

文蝶
葉光
兎
柳宏子
梅里
正一
庸佑
生薑
文秋
万里
奈良子
好郎

文蝶
葉光
兎
柳宏子
梅里
正一
庸佑
生薑
文秋
万里
奈良子
好郎

文蝶
葉光
兎
柳宏子
梅里
正一
庸佑
生薑
文秋
万里
奈良子
好郎

文蝶
葉光
兎
柳宏子
梅里
正一
庸佑
生薑
文秋
万里
奈良子
好郎

文蝶
葉光
兎
柳宏子
梅里
正一
庸佑
生薑
文秋
万里
奈良子
好郎

文蝶
葉光
兎
柳宏子
梅里
正一
庸佑
生薑
文秋
万里
奈良子
好郎

文蝶
葉光
兎
柳宏子
梅里
正一
庸佑
生薑
文秋
万里
奈良子
好郎

文蝶
葉光
兎
柳宏子
梅里
正一
庸佑
生薑
文秋
万里
奈良子
好郎

川 雑 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

善い父は聞き手にばかりされ
里帰り父は話題の外に置き
父さんは暢気すぎます通信簿
見解の相違恥とは思ってはず
天国で父に逢えると無邪気な
奥さんですかといらぬ恥かかせ
朝寝床出て厳格な父となり
支えともなる父逝きて家離儀
父なし子もう欺されぬ年となり
子煩悩な父を想んで花ささげ
恥知らず弥次の喝采真に受けて
この年で自立つお腹の恥かしさ
意地も捨て恥も忘れた半世紀
恥入ると実は自慢の裏を云い
恥かいたあとボソボソと弁解し
どん底に落ちたわたしと不貞腐れ
正業のどんな姿も恥とせず
袖屏風恥かしかった頃もあり
飲み仲間ゆうへの恥は黙つとり
頑固であつたが義理の堅い父
父の日のプレゼントと母に問
子等のため働き通し父は近き
恥知らずと言われたくな自尊心
子が父となつて親父の恩も知り
眞実を言わんが為の恥忍び
恥かしや喰つて寝て起き五十年

万里歩
呆児
銀水
須摩子
揮山
魔花麗
弦月
周防
紅茶
玉屋
緑星
東太樓
吳潮
平八郎
沈丁花
柳葉
泉水
カロ女
快夢起
義一
美潮
エス子
内海
萩路
紅涙

万里歩
呆児
銀水
須摩子
揮山
魔花麗
弦月
周防
紅茶
玉屋
緑星
東太樓
吳潮
平八郎
沈丁花
柳葉
泉水
カロ女
快夢起
義一
美潮
エス子
内海
萩路
紅涙

万里歩
呆児
銀水
須摩子
揮山
魔花麗
弦月
周防
紅茶
玉屋
緑星
東太樓
吳潮
平八郎
沈丁花
柳葉
泉水
カロ女
快夢起
義一
美潮
エス子
内海
萩路
紅涙

万里歩
呆児
銀水
須摩子
揮山
魔花麗
弦月
周防
紅茶
玉屋
緑星
東太樓
吳潮
平八郎
沈丁花
柳葉
泉水
カロ女
快夢起
義一
美潮
エス子
内海
萩路
紅涙

万里歩
呆児
銀水
須摩子
揮山
魔花麗
弦月
周防
紅茶
玉屋
緑星
東太樓
吳潮
平八郎
沈丁花
柳葉
泉水
カロ女
快夢起
義一
美潮
エス子
内海
萩路
紅涙

万里歩
呆児
銀水
須摩子
揮山
魔花麗
弦月
周防
紅茶
玉屋
緑星
東太樓
吳潮
平八郎
沈丁花
柳葉
泉水
カロ女
快夢起
義一
美潮
エス子
内海
萩路
紅涙

万里歩
呆児
銀水
須摩子
揮山
魔花麗
弦月
周防
紅茶
玉屋
緑星
東太樓
吳潮
平八郎
沈丁花
柳葉
泉水
カロ女
快夢起
義一
美潮
エス子
内海
萩路
紅涙

万里歩
呆児
銀水
須摩子
揮山
魔花麗
弦月
周防
紅茶
玉屋
緑星
東太樓
吳潮
平八郎
沈丁花
柳葉
泉水
カロ女
快夢起
義一
美潮
エス子
内海
萩路
紅涙

万里歩
呆児
銀水
須摩子
揮山
魔花麗
弦月
周防
紅茶
玉屋
緑星
東太樓
吳潮
平八郎
沈丁花
柳葉
泉水
カロ女
快夢起
義一
美潮
エス子
内海
萩路
紅涙

万里歩
呆児
銀水
須摩子
揮山
魔花麗
弦月
周防
紅茶
玉屋
緑星
東太樓
吳潮
平八郎
沈丁花
柳葉
泉水
カロ女
快夢起
義一
美潮
エス子
内海
萩路
紅涙

万里歩
呆児
銀水
須摩子
揮山
魔花麗
弦月
周防
紅茶
玉屋
緑星
東太樓
吳潮
平八郎
沈丁花
柳葉
泉水
カロ女
快夢起
義一
美潮
エス子
内海
萩路
紅涙

万里歩
呆児
銀水
須摩子
揮山
魔花麗
弦月
周防
紅茶
玉屋
緑星
東太樓
吳潮
平八郎
沈丁花
柳葉
泉水
カロ女
快夢起
義一
美潮
エス子
内海
萩路
紅涙

万里歩
呆児
銀水
須摩子
揮山
魔花麗
弦月
周防
紅茶
玉屋
緑星
東太樓
吳潮
平八郎
沈丁花
柳葉
泉水
カロ女
快夢起
義一
美潮
エス子
内海
萩路
紅涙

万里歩
呆児
銀水
須摩子
揮山
魔花麗
弦月
周防
紅茶
玉屋
緑星
東太樓
吳潮
平八郎
沈丁花
柳葉
泉水
カロ女
快夢起
義一
美潮
エス子
内海
萩路
紅涙

川 雑 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

都会の鼠ネオンが発汗す
手の甲の青すじ指輪失う日
青筋が浮く程産婦乳房はれ
うまそうに飲む子に飲ませ
お互に上目目交わら吸う兄弟
お附合します私は中ジョッキ

枯粒
紫蘭
生薑
司郎
鳥雀
喜山

川 雑 篠山支部句会 (兵庫県)

酒井ひか平報

水害の船はニニスになつた
大かまどでんと構えて電化村
シヨートペン日本一の恋みり
清流の上の洗濯見てしま
清流へすねまでつかる娘の歡喜
マージャンの暖へせと音高し
清流へサイクリングの風を入れ

可住
弥栄
みひる
ひか平
孝風
白猫児
孝風

可住
弥栄
みひる
ひか平
孝風
白猫児
孝風

清流へ銀鱗の飛ぶ午下がりに 無鬼
保守支持で値上げへ泣く農夫 青峰

川維 備前支部句会 (岡山県)

浜田久米雄報

共稼ぎ家計の赤字なすり 合い 半歩
大臣の答弁うなぎのように逃げ 稔
えげつない事は横目で云つてのけ 若菜
うなぎ屋の生けすは客の方へ向け 香林
奥様の横目が話題変えさせ 久米雄
土用丑どうでも寄れといううなぎ 鮎ん坊
家計簿を出して税吏に食い下り 半翁
悪友が来て靴べらを持って待ち 東岸
女房の横目が効いて声が出ず 輝次
家計簿へ小さく書いたパパの酒 鮫虎狼
靴べらで十一文をやつと履き 哲朗
父さんの釣つたうなぎの八幡巻 仁斉
受付に横目のままであしらわれ 秋月
家計簿に無駄買いをした字を認め 博
靴べらに追いたてられた旅の宿 佐加恵

川維 奈良支部句会 (奈良市)

内海敬太郎

応援歌強き日さしをはねかえし 建太郎
陽々に海賊の居た観光地 孚彦
夕立ちに夫婦喧嘩も仲直り 三知
ものすごい顔振れ揃え応援 源太
青い空白帆が浮いてる海だった 推明
夕立ちの雨宿りライバルの家 泰彦
白球を彼女の眼が追うネット裏 敬太
ニューモード夏の海に浮んでる 壮士
のき下によつと入ると雨土り 宏敬
応援団選手に負けず練習し 博
故郷は丘を越えれば海が見え 敬三

夕立ちへあきらめた様に露店商 春己
石ころの丸み素石をさらう波 笛生
海ありて朝日いよいよ輝きぬ 薫風子

杏林川柳会 (大阪市)

口止料出しつ出されつ赤げつと 太希志
見物をされて結構したつもり 野迷路
妻つれてする外遊は古輪をすぎ 阿茶
飛行機の隅でワンマン稍シヨクテ 珊瑚郎
水さかずきせんばかりの鹿島立ち 一伸
アメリカン英シヨクパレシヨクして帰リ 五十六
外遊は名ばかりの唾の旅つづけ 小石
外遊のさらばさらばは見下ろして 腹乃

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

見送りの数も馴れて妻の座二十年 雄声
見送りの数を競って羽田たち みなづき
栄転の見送りどつと押し寄せる 貴山
空港の見送り草がなびく風 葉平
見送りの派手な列車へ乗り合せ 宏子
見送りに来てお守りも渡しとき 文蝶
見送りに座席取らして老の旅 句念坊
見送って厄介者の数が減り 圭水
見送りでおつちよちよいかヤンキーさき 路郎

コクヨ川柳会 (大阪市)

川口理休報

畳だけ出せば亭主は無用なり 柳波
大掃除西瓜で寄せた人の数 瑛巳
冷房完備で骨のズイ違ひしりり 理休
借金が増えるばかりのレジャーなり 留鈍
冷房中と半紙に書いた散髪屋 龜心
大掃除すんで風鈴鳴っている ぼたる

大掃除へソクリ見つけ坐りこむ 義広

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

表情を崩さずお世辞だけ並べ 紅梅
表情で察しなさいと女将消え 庄平
引きしめる親節の表情負けん気 露村
うらぶれて保証の義務も忘れがち 星女
レットテルに保証のしるしあるけれど とも子
療養所昼寝の出来る不倖せ ひろむ
才女でも昼寝の顔は口をあけ 美代
昼寝する女の細き描き眉毛 六竜子
洗濯は機械にまかせ昼寝する 雄声
土地半分売って月賦の家を建て 吉太郎
とも角も住むに事足る土地を買い やなき
ダンブダンブゆく新しい土地作り とも子
土地ブーム田植姿もまれになり ふじ
土地ブーム我が世の春のお百姓 呑天
これも土地朝顔種子の育くむ函 八郎
開放の豊地大金はいる御代 静林庵
風呂敷も美人が持てばなまめかし 紅月
風呂敷のまままで渡しやと児の使い 周一
日本に風呂敷があり誰の知恵 摩天郎
要件を見抜き風呂敷突き返し 太路

明和研究会 (西宮市)

樋口舟遊報

新調を無視する友が一人いる 美智子
ムードだけのものさ友情だなんて 鬼
友達と会えば素直になつて 菁風
たよりない友ではあるが診てもらい 蝶花
裏切りし友よ椿が咲き初める 千尋
何処にも友ありという異人 悠紀

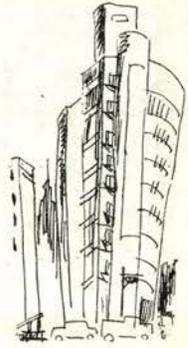
よつてたかつて毒舌のあなたを 新子
戦友が消したい過去を捨つてくる 夢虹
海の向うにペンフレンドがいて美女ならず 清生
ガキリ地球を廻つたニューズ沸く 大丘子
その裏にいつも米ソがいてニューズ すむ
たれ暮の満員御礼が厚く見え 呂人
満員車恋人同士の眼のやり場 六竜子
庭いじりリストがあろうと若葉時 三舟
週末の夜を夜桜が招いている 都詩子
週末の乗り合うバスに古き友 行人
週末へ別れを告げるみおつくし 呂人
すし詰の汽車に週末旅行好き 有岡
天仲をかついだ肩が未ださがり 正祐
童心が画きながつてるピカッの絵 生蔵
童心にパパよりママがえらく見え 静馬
童心にうすうす気付く左まえ 曙蟬
童心にかえれとすみれ、れんげ草 薫風子
砂さえあれば童心うすくまり 梅志
春が近く散る花びらにのつて行く 牧人
ロイドショー見ている内は夢があり 小袖
思い出と重なる女の顔があり 舟遊

梅里の店

★大万川柳(第百二十七回)を募る
兼贈「小説」一冊 説一 路郎先生選
締切・九月十五日 五句以内
発表・九月廿日 (店内発表)
投句先 阿倍野区松崎町三ノ二
大万川柳会宛

大万

酌よし 千日前大劇裏
TEL072-271-0
味よし ズベノ橋近地下
TEL072-0247



柳樽室

路郎生

★まだ残齋がきびしいが、海にも山にも出かけないで、朝から夜遅くまで短詩の世界に没頭している。これが私の生活のすべてである。

★本誌の内容が月を遡うて充実する。それは寄稿家諸氏の絶大な支援と柳友諸氏の向上を意味することは言うまでもないが、編集局は編集局としての全力を傾倒している。作家諸氏はどしどしいい句を寄せられて、一層の協力をお願いしたい。天下の耳目を聳動させた釜ヶ崎事件の惹起した夕は西川晃君を訪ね、一丁先に、そんな事件が發生していることを知らずに、十時半頃に覺悟を辞したが、もう少ししたら、人波に巻き込まれて溺れなかつたかも知れない。新聞紙上ですでに承知のことなので詳報はしないが、とにかく淺間山が急にバクハツしたよりも、もっと激しく人の心をゆさぶった。本号では西成在往の川柳人に、少しくそのことを、句・文によってふれてもらった。

★瑠璃「道草」は本号では松山市の今昔と伍健吾の巻へ頼ずいたこと

とを書いた。そして次号で「松山市」の項は完結する。
こんどの一都五百六十一市の旅には順序はない。どこからどこへ飛ぶか、自分にも判っていないのが楽しみでもある。
★がめついでことをして、食うものも食わずに貯めた人がいる。毎日パチパチとそろばんを弾いて満足して死んで行った。ほくそ笑んだのは税務吏と嗣子だけだった。

川柳人豆秋は金は残こさなかったが、川柳によって生甲斐のある生涯を送り、遺産として多くの名句を私達に遺してくれた。奥さんに対しては余生を支えるだけの方法が講じられた。ア然としたのは名句に税をかけられない税務吏だけだった。「いのちある句を割れ」である。

★郵便物はあつちこつちで相変わらずモクモクしている。日本人のアタマは精神的から物質的へと移動した。なげかわしいことである。
▼ペンの散歩▲
▼先生は五才以上若がえられた。ここでボクのことを書くのはスペースの無銭飲食をするようだが、ボクも五才以上若くなったそうである。漫才の原稿なんか書いていると若くなるのだろうか。
▼「西成の怒り」は新聞記事に見られないものでこれはタイムリーだとおもう。新聞人としての東野大八氏も釜ヶ崎を書いて送ってくださった。釜ヶ崎とはこんな街なのだ。

▼夏きらいの腹乃先生は連日「あつちこつち」を連発される。この点は路

郎先生とは両極端で、北海道と南九州が一つどこにおられるようなものである。
▼秋の作品展、大阪市文化祭川柳大会と秋はかけ足だ。もう一度表紙の2と29ページを二覽ください。(二三犬)

★九月句会・川雑支部

- ☆淀川句会・11日(月)六時、題、大人・落し物・インスタン
- ト、所、十三西之町五丁目東淀川郵便局。☆かがみ句会・2日(土)七時、題、表札・青筋・凶星・踏み
- 台・予感、所、池田古心居。☆宇宙句会・5日(日)切、題、自称・アイロン・飛脚・粒、投句先、美弥
- 市大嶺町平原坂、安平次弘道宛、☆奈良句会(吟行)3日(日)九時、題、弁当・洗濯・吟行雑詠、所、近鉄西ノ京駅集合。☆米子句会・10日(日)一時、題、再起・命・キャンプ、所、米子市公会堂
- 和室。☆明和研究句会・10日(日)一時、題、波・月・肌、所、阪神鳴尾駅東南二百米、鳴尾公民館。☆京都句会・16日(土)夕、題、指紋・断面・だるま、所、四糸繩
- 手仲源寺。☆玉造句会・11日(月)七時、題、手芸・雑役・残り、所、市電玉造南百米、大阪信用金庫。☆にしなり句会・17日(日)六時、題、十年・残書・勤め人、所、西成区玉出新町通一ノ一、後藤梅志居。☆阿倍野句会・20日(水)七時、題、和製・すかたん・半額
- ・月おくれ、所、阿倍野区松崎町三ノ一、割烹大方。☆南海電鉄句会・21日(木)六時三〇分、題、車内・手おくれ・説明、所、難波高梁下、観和クラブ。

川柳 親ところ子心

備 150円 送料50円

若本多久志著 麻生路郎序
「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中からよく拾い蒐めたのが本書である。多軒に亘つて根柢登載された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知ることに出来る。実に有意義な書である。

風流 人間横丁

備 250円 送料70円

東野大八著
★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックパランな人生批判が、その雄筆からほととびしるさまは凄似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクと川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

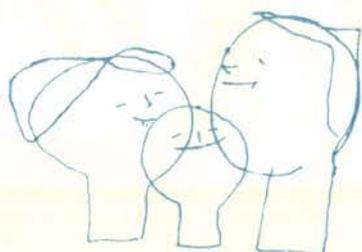
高鷲亜純著 詩川柳考

B6型函入 定価三百八十円 送料九〇円

★著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であったがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した/今は柳界にあって庶民の詩人的自覚を促す/ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る/凡そ前向作家を自負する柳俳人必読の書

★送料は振替口座をご利用が便利で安全です。(切手代用可)

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL 64 551-2

★この1本で…
元気が
いっぱい



グロンサンの姉妹品「グロンサン内服液」が出来ました。大量のグロンサン(六〇〇mg)グロンサン(十二錠分)が、吸収されやすい液剤になつていますから、おのみにならず、効きめが、ハッキリわかつてきます。体力増強、疲労の回復、栄養の補給、二日酔い、グロンサン錠と同様、広い範囲に効きめをあらわします。

ここに、夜尿・痲痺などの多い方、はげしい筋肉痛等に從事する方、お仕事・スポーツの前後に

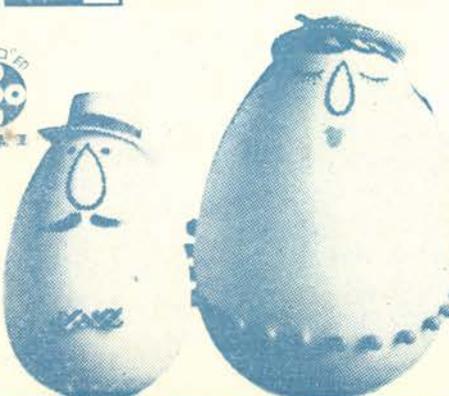
1本=100円 (もろ運びに便利なおもろ本入りもあります)



東京・日本橋・本町
中外製薬

体力・活力・精力
ヘルスロンゲ

肝臓や血
管を若々
しく丈夫
にし、ビ
タミンや
栄養を補
給し、精
力増強
する新しい保健康薬です。体力・活力・精力を総合的に生み出し、お二人の人生を健康で楽しくいたします。



ホテル 白浜温泉 平草原
パシフィック

TEL 白浜温泉733 大阪案内所(64)8686



白浜口ゆき 直通列車
才2きのくに……………毎日 なんば発 12.37
週末準急くろしお土曜ごとク 13.10
新宮ゆき 直通列車
なんき1号……………毎日 なんば発 8.10
夜行直通……………ク ク 22.07

のりは大阪なんば 南海電車

昭和三十三年七月二日 第三版発行
昭和三十三年九月二日 発行(九月二日)第一版
川柳雑誌社 川柳雑誌社
定価九十円